

【翻刻・解題】 山陰歴史館蔵『尾張廼家苞』飯田秀雄書き入れ注 一之上

**渡邊 健

概要

米子市立山陰歴史館が所蔵する下鹿島家旧蔵の和歌資料の中から、『尾張廼家苞』飯田秀雄書き入れ注 一之上を翻刻、紹介する。飯田秀雄による『尾張廼家苞』書き入れ注については、従来、『尾張』五巻九冊のうち巻二（第三・四冊）・巻三（第五冊）・巻四（第六・七冊）に秀雄自筆本が存し、巻五（第八・九冊）にその転写本があることが田中仁氏により報告されていた。一方、巻一（第一・二冊）については第一冊に部分的に十四首分の秀雄自筆書き入れ注が草稿として残るものの、その全体を知る手掛かりは失われていた。しかし近時、山陰歴史館に所蔵されていることが明らかになった『尾張廼家苞』飯田秀雄書き入れ注の転写本は、下鹿島家の鹿島重正が書写した全巻揃い本であり、これまで知られなかった巻一の内容を伝える重要な資料である。

解題

一 『尾張廼家苞』飯田秀雄書き入れ本について

『尾張廼家苞』飯田秀雄書き入れ本は、近世後期の因幡の歌人・国学者である飯田秀雄（寛政三年（一七九二）～安政六年（一八五九））が石原正明著『尾張廼家苞』文政二年板本に書き入れ注を施したものであり、近年、田中仁氏（鳥取大学名誉教授）が飯田家所蔵資料の一つとして秀雄自筆本を翻刻・紹介された^{（注1）}。秀雄自筆本には写本一冊・板本三冊の二種類がある。前者は、紙縫で仮綴じされた写本であり、『尾張廼家苞』文政二年板本第一冊十丁表から十七丁裏第五行までの十四首分の注釈本文を書き写したものに、朱による書き入れが施されている。後者は、『尾張廼家苞』文政二年板本に秀雄が書き入れを施したものであるが、『尾張』五巻九冊のうち、第一・二冊と第八・九冊は失われて無い。残る第三～七冊は、第三・四冊、第八・九冊が合冊されており、第五冊と合わせ三冊が残されている。

田中氏はこの二種の資料を翻刻されるとともに、詳細な解説を付し、以下のような検討をなされている。すなわち、（一）書き入れの時期について

は、秀雄の『御役所向諸日記』の天保年間の記事に「午春尾張家づと并桂園一枝等書入拙案を記ス」^{（注2）}とあることから、天保五年（一八三四、癸午）春と推定されるが、『尾張』五巻九冊に及ぶ書き入れの全部がこの時に完成したとはどうも考えられない。（二）秀雄自筆書き入れのうち、写本一冊は書き写された注釈本文の行間や余白に注が書き入れられているが、板本三冊は、『尾張』板本への直接の書き入れに加え、貼紙や挟み込み紙片への注も多く、多様な書き入れがなされている。（三）板本への書き入れは筆跡や形態の違いから、複数の筆者によるものと判断される。書き入れの大部分を占める、片仮名・漢字を用いて書かれた注は、筆跡により秀雄によるものと推測できる。次に多い平仮名・漢字による書き入れは未詳だが、伊達千広（紀州の歌人。享和二年（一八〇二）～明治一〇（一八七七）。本居大平の門人で秀雄と同門）か堀内信平（伝未詳。播磨あるいは倉吉の歌人か）の可能性がある。片仮名・漢字による書き入れには加納諸平（文化三年（一八〇六）～安政四年（一八五七）。本居大平門の紀州の歌人で秀雄と親交）によるものが巻二・巻三に確認できる。（四）秀雄の二種類の書き

入れ注のうち、巻一の十四首分のみの写本は、秀雄書き入れ『尾張』の原形だったのではないか。秀雄ははじめ『尾張』を自ら書き写したものに注を書き入れていたが、全巻完結後かその途中で『尾張』板本を入手し、それに写本の書き入力を転記したことが考えられる。

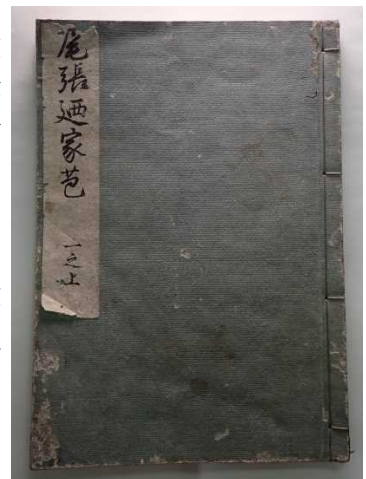
その後、田中氏は鳥取県立図書館に所蔵される橋本栗谿旧蔵『尾張廻家苞』（五卷九冊）の巻三第五冊（第十三丁裏まで）・巻五（第八冊・第九冊）に秀雄書き入れ注が転写されていることを発見され、巻五を翻刻・紹介された^{〔注3〕}。貼紙・挟込紙片はなく、すべて『尾張』板本への朱筆での書き込みであるが、巻三第五冊を秀雄自筆本と比較するとほぼ同文で忠実に転写されていることから、巻五についても同様に考えてよいとする。

二 『尾張廻家苞』飯田秀雄書き入れ注 新出資料について

先述したように、『尾張廻家苞』飯田秀雄書き入れ注については巻二～巻四（第三～第七冊）に秀雄自筆本があり、巻五（第八・九冊）は栗谿本に秀雄書き入れ注の転写が見られるが、巻一（第一・二冊）については、秀雄自筆の写本に第一冊一四首分の注が存する他は、全体の内容を知るのに手がかりのない状態であった。しかし近時、原豊二氏（天理大学）からの私信により、山陰歴史館に『尾張廻家苞』付注本があることを教えられ^{〔注4〕}、稿者が調査したところ、『尾張』五卷九冊の全てにわたって飯田秀雄書き入れ注を書き写した本であることが分かった。一方それとは別に、鳥取県立図書館に『尾張廻家苞』全巻の写本に巻一（第一・二冊）のみ秀雄の書き入れ注が施された本があることも分かった。稿者はこれら新出資料について、『日本文学研究ジャーナル』第三二号（以下前稿と称する）で紹介し、秀雄が書き入れの執筆をなすに至った背景や成立時期、受容の様相等について考察を行った^{〔注5〕}。詳細はそちらに依られたいが、ここではまず、それぞれの書誌について確認しておく。

(1) 山陰歴史館蔵本（鹿島美彦旧蔵本）

（写真1）一之上 表紙



〔整理番号〕「鹿島美彦家資料二」六・四六～五四

〔表紙〕 縦二六・〇糎×横一八・一糎（第一～五冊）、縦二六・一糎×横一八・二糎（第六～九冊） 縹色無地布目表紙

〔外題〕 題簽に「尾張廻家苞 一之上」・「同 一之下」・「同 二之上」・「同 二之下」・「同 三」・「同 四之上」・「同 四之下」・「同 五之上」と記す。五之下のみ題簽が剥がれて無し。

〔体裁〕 袋綴板本五卷九冊 楮紙

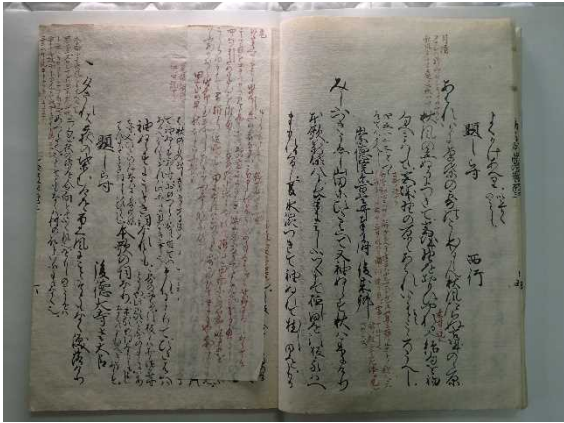
〔丁数〕 一之上 三十一丁、一之下 三十五丁、二之上 三十一丁、二之下 四十八丁、三 三十五丁、四之上 三十二丁、四之下 三十二丁、五之上 四十二丁、五之下 四十七丁

〔構成〕 一之上（序）・「春歌上」、一之下「春歌下」「夏歌」、二之上「秋歌上」、二之下「秋歌下」「冬歌」、三「賀歌」「哀傷歌」「離別歌」「羈旅歌」、四之上「恋歌一」「恋歌二」「恋歌三」、四之下「恋歌四」「恋歌五」、五之上「雑歌上」「雑歌中」、五之下「雑歌下」「神祇歌」「釈教歌」

〔備考〕

この山陰歴史館蔵本は近世後期に鳥取の米子で豪商として栄えた鹿島家の分家・下鹿島家旧蔵本である（以下、鹿島本と呼ぶ）。同館整理番号「鹿島美彦家資料二」六・四六～五四。『尾張廻家苞』文政二年板本五卷九冊揃いであるが、一～三巻は縦二六・〇糎×横一八・一糎、四・五巻は縦二六・一糎×横一八・二糎（第六～九冊）とわずかに大きさが違い、表紙も前者

が千草色に近いのに対し後者は若竹色に近い色であり、両者はそれぞれ違う機会に入手した本を取り合わせたことが考えられる。九冊とも表紙見返し右下に「伯州 米子 鹿嶋」の蔵書印を有する。書写者は、筆跡から見て下鹿島家の鹿島重正（文化一三年「二八一六」）と安政四年（「一八五七」）と判断される。巻五第九冊（五之下）の最終歌「暗はれてこゝろの空にすむ月はにしの山邊や近く成らむ」の後に、「スベテ美濃ニナキ述懐釈教ノ歌ヲ多クエリ出タルハウルサシ 皆風韻ノビダル歌ハ一首モナシ皇国魂ナラヌ歌ナレバ也」という注に続けて「右書入嘉永六癸丑初冬寫畢」との識語があり、この書き入れの転写が嘉永六年（一八五三、癸丑）初冬までに成されたことがわかる。鹿島本と飯田家本（秀雄自筆書き入れの存する巻二・三・四）を比較すると、表記の違いはあるもののほぼ同文であり、写真で見ると書き入れの位置や貼紙の体裁などもなるべく秀雄自筆本に倣う形で行われている。

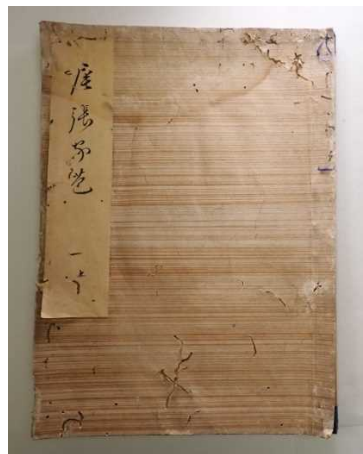


（写真2）鹿島本二之上（五ウ・六オ）



（写真3）飯田家本二之上（五ウ・六オ）

（2）鳥取県立図書館蔵本（田中穠旧蔵本）
（写真4）一上（表紙）



〔整理番号〕「W911.1 イシハ 一般 WH 73-81」

〔表紙〕 横刷毛目 縦二六・九×一九・四糎

〔外題〕 左上に題簽「尾張家苞 一上・一下・二上・二下・三・四上・

四下・五上・五下」と直書

〔体裁〕 大本 楮紙 袋綴写本九冊

〔本文〕 一面〇〇行 和歌一首一行書き

〔丁数〕 一上 三九丁、一下三五丁、二上 三二丁、二下 四八丁、三

三五丁、四上 三三丁、四下 三二丁、五上 四二丁、五下 四

七丁

〔構成〕 一上（序）・「春歌上」、一下「春歌下」「夏歌」、二上「秋歌上」、

二下「秋歌下」「冬歌」、三「賀歌」「哀傷歌」「離別歌」「羈旅歌」、

四上「恋歌一」「恋歌二」「恋歌三」、四下「恋歌四」「恋歌五」、五

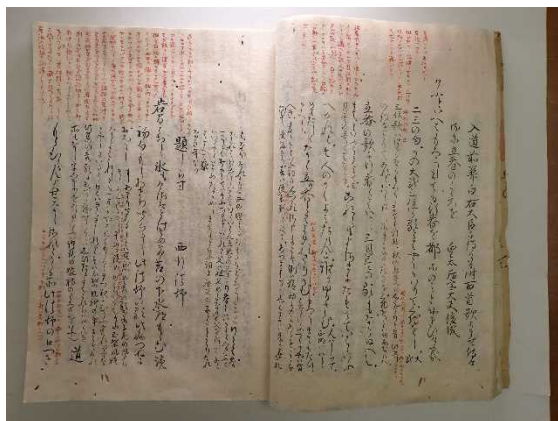
上「雑歌上」「雑歌中」、五下「雑歌下」「神祇歌」「釈教歌」

〔備考〕

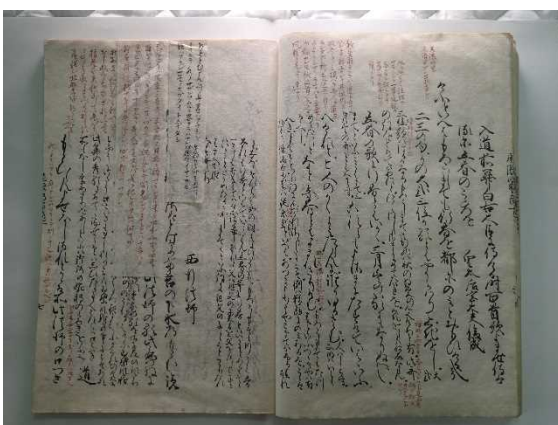
近世末期の書写と見られる。袋綴写本五巻九冊に『尾張廼家苞』文政二年板本が忠実に書写されている。板本の本文と比較すると字母まで同じで書体も似せて書かれているが、版心の書名・丁数は記されていない。巻一第一・二冊のみ秀雄書き入れ注が写されており、本文は鹿島本とおおむね同文であるが、秀雄自筆本にあるような貼紙・挟み込み紙片などはなく、

すべて本文上に朱筆で頭書や余白への書き込みがなされている。奥書等もなく書写の時期、筆者、伝来の経路は不明である。

(写真5) 田中本一上(六ウ・七オ)



(写真6) 鹿島本一之上(六ウ・七オ)

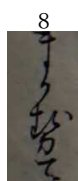
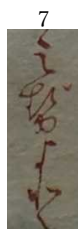


三 山陰歴史館蔵本の書写者について

前稿でも述べたが、山陰歴史館蔵『尾張廻家苞』飯田秀雄書き入れ注転写本の書写者は、先述したように鹿島重正である可能性が高い。理由の一つは、下鹿島家旧蔵資料の中にこれがあり、鹿島重正の直系の子孫である鹿島美彦氏がもと所蔵されていたものが山陰歴史館に寄贈されたという伝来の経緯である。(先述したように、同本は九冊すべてに鹿島家の蔵書印「伯州 米子 鹿島」が付されている。)

二つ目はその筆跡であり、山陰歴史館に所蔵される鹿島重正自筆和歌詠草(注6)の文字と比較すると、以下のようにその類似が顕著である。

(写真7) 14 赤字Ⅱ山陰歴史館蔵『尾張廻家苞』書き入れ本 黒字Ⅱ同館蔵『鹿島重正和歌詠草』

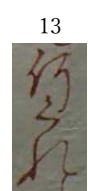
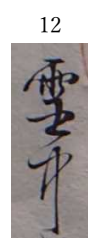


みせよと

まかせて

木国

木国



中に

雪中

何くれ

くれし

三つ目は、鹿島重正と飯田秀雄の息・年平との間には親交があったことで、鹿島重正和歌詠草・下之巻(二八ウ)には、

神無月廿日あまり飯田年平にはじめてあひけるに、程なく出雲の国へと打立ければ

晴曇るしぐれの雨にことよせてけふの別れをとどめてしがなという歌がある。また、加納諸平編『類題鯁玉集』五編(弘化二年「一八四五」六月刊)には、

う月のはじめつかた飯田年平ぬしのかへらるゝに

いそぐとも過ぎし春にはおひつかじ今年のみだに君とまらなん 重正 かへし

行く春に立ちおくれたる旅衣なれてなか／＼くるしかりけり 年平 という鹿島重正と飯田年平の歌の贈答が見られる(雑一三オ)が、これは鹿島重正和歌詠草・下之巻(三五オ)に、

飯田年平が卯月はじめつかた ふる郷にかへるををしみて 行く春をうらみ兼ねたるけふなれば君が別れはしばしとどめよと詠んでいるのと同じ折の歌と思われる。

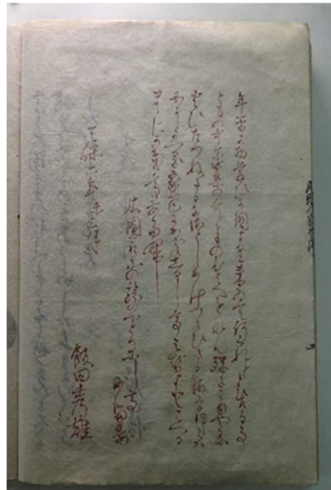
こうして、山陰歴史館蔵本は、鹿島重正が飯田年平を通じて『尾張廻家苞』飯田秀雄書き入れ本を借り受け、『尾張』板本に秀雄注を転写したものであることが推定できる。重正の没年は安政四年(一八五七)であり、この本の識語に「右書入嘉永六癸丑初冬寫畢」とあり、書き入れの転写が嘉永六年(一八五三、癸丑)初冬までに成されたことと矛盾しない。

四 新出資料により明らかになった点

(1) 成立時期

この書き入れ注の成立時期については、第一節で触れたように田中仁氏が、飯田秀雄『御役所向諸日記』の天保年間の記事に「午春尾張家づと并桂園一枝等書入拙案を記ス」とあることから、天保五年（一八三四、癸午）春と推定されたが、『尾張』五巻九冊に及ぶ書き入れの全部がこの時に完成したとはどうい考えられないとも考えられていた。一方、新出資料では、

（写真15）鹿島本一之上（序三ウ） 飯田秀雄自序



『尾張』一之上の初めに飯田秀雄の自序があり、そこには、

年平が物学びに国より来ゐて何くれととひける事どもの中に此集の哥どもの心ばへをなん殊にこまやかにとひたづねたるにさとしあげつらひたる趣を同じくは国にかへる家苞にかきしるしてみせよとこへるまゝにかきてあたふ

木国若山の旅のやどりにしてしるす

天保六年末三月

飯田秀雄

と書かれている。これにより、天保五年春から書き入れが始まり、天保六年三月に成立したことが推定できる。

(2) 執筆の動機

秀雄の自序からは、この書き入れ注の執筆の動機が、息・年平の求めにより『新古今集』の表現の意図や趣意を教え諭すことにあったことも分か

る。天保五年四月、郷里の因幡に帰国するため紀州を離れることになった秀雄^{（注）}が、紀州にとどまり歌学びを続ける息・年平のために置き土産として執筆したことになる。一方で、この文章は、

大矢ノ重門が物まなびに、美濃ノ国より来居て、何くれととひける事どもの中に、此集の哥どもの心ばへをなん、ことにこまやかにとひたづねたるに、さとしあげつらひたる趣を、おなじくは国にかへらむ家づとに、書しるしてえさせよとこへるまゝに、かきてあたふ。

（『美濃の家づと』本居宣長自序）

正俊が尾張の国より来ゐて、何くれととひける事の中に、新古今集の歌どもものこゝろばへをなん、ことにこまやかにとひ尋たるに、さとしあげつらひたる趣をおなじくは国にかへらん家づとに書しるしてえさせよとこへるまゝにかきてあたふ。

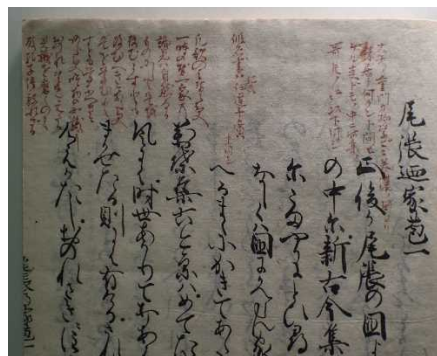
（『尾張廻家苞』石原正明自序）

と、『美濃』宣長自序・『尾張』正明自序の措辞を明らかに踏まえている（注）。『尾張』が『美濃』を踏まえつつ師説を批判的に継承する注釈書であったことを想起するならば、秀雄の書き入れ注も、『美濃』『尾張』両家苞の批判的継承を目指していたことが考えられる。

(3) 伊達千広注について

鹿島本の記載により明らかになることとして、伊達千広注の問題がある。第一節で触れたように、田中仁氏は、板本への書き入れは筆跡や形態の違いから、複数の筆者によるものと判断されていた。田中氏は、書き入れの大部分を占める、片仮名・漢字を用いて書かれた注は、筆跡により秀雄によるものとし、次に多い平仮名・漢字による書き入れは、未詳だが伊達千広か堀内信平の可能性があり、筆跡からいえば信平ではないかと考えられていた。一方、新出の鹿島本では『尾張』一之上冒頭部分の書き入れ（頭書）に、「仮名書ハ 紀州伊達千広 末同ジ」とあることから、平仮名・漢字の注は、伊達千広の『尾張』書き入れ注を転写したものではないかと考えられる。

(写真16) 鹿島本 一之上(二才) 頭書



田中穠旧蔵本にはこの記載は無いが、両本とも『尾張』一之上(二才)の頭書から、「凡歌のみならず一時の勢一家の識見は自然なるものにして是を改むとすとも改むべきにあらず是を学むとすとも学ぶべきにあらず唯物の知識におのれ生れえたる見識を磨くのみ」と始まる平仮名・漢字書きによる長文の書き入れがあり、その中に「こゝに千広も又此集に所見なきにはあらず」と自ら「千広」と呼称する箇所がある。また、『新古今集』前後の歴史と和歌史を踏まえつつ『美濃』『尾張』を批評し長文に及ぶ自説を展開するその内容も、千広の歌論『随々草』『和歌禅話』等と比較して矛盾しない。平仮名・漢字表記の書き入れ注の筆者については、やはり伊達千広が該当すると考えるべきであろう。

なお、飯田年平の歌論『石園歌話草稿』付載部分(一般には「美濃尾張家苞両評」として知られる)に、「天保のころ伊達千広のかける尾張家苞の評めくものありしかど、その書今ありやなしや。又父翁のものせられしおなじさまなるものありしを、門人ども取つたへ／＼せし後いかにしたるにか、いづくにありしといふ事もしられずなれり。さる故に見合はすべき由なきはいかゞはせむ。」^(註)とあるのは、秀雄の『尾張』書き入れ注流布の様相を示すものとして注意されるが、伊達千広も秀雄と同時期に「尾張家苞の評めくもの」を書いており、おそらくその一部が秀雄の書き入れ注に

取り入れられて残ったと考えられる点で重要である。

五 新出資料の特徴と問題点

以上、本解題では、新出の鹿島本は全冊揃いの転写本であり、伝来・書写者も明らかで親本に忠実に書写されており、注目すべき資料であることを述べた。また、今回紹介した鹿島本・田中本により『尾張』書き入れ注巻一(第一・二冊)の内容が明らかになり、成立時期・執筆の動機等について新たな知見が得られることを述べた。最後にこの新出資料の特徴と問題点を整理して説明を終えることとしたい。

(1) 鹿島本

・伝来の経路、書写の時期が明らかで、書写者も特定できる。

・飯田秀雄自筆書き入れ注を、その本文だけでなく墨色、書き入れの位置、貼紙、挟込紙片等の体裁も含めて忠実に書写する姿勢が顕著である。

・田中本にない書き入れ注記があり、その中には「仮名書ハ 紀州伊達千広 末同ジ」のような重要な情報も含まれる。

・田中本と比較した場合、単純な誤字・脱字が多い。鹿島重正は好学の商人であるが、本格的に歌字・国学を修めた経歴はないため、リテラシーが高くないことには留意する必要がある。

(2) 田中本

・鹿島本との異文を比較すると、田中本の方が用字や語句、文法的に間違いないと判断されるケースが多い。

・平成二四年に旧蔵者・田中穠が鳥取県立図書館に寄贈した事以外に、伝来の経緯が知られず、書写者やその時期などもわからない。

・飯田秀雄自筆書き入れ注の本文を忠実に書写しているが、貼紙や挟込紙片に書かれていた注記もすべて頭書や余白に書き込まれており、そうした箇所は原態が復元できない。また、書き入れはすべて朱筆で行われており、鹿島本が黒・朱の使い分けをしているのが本来の形ではないかと考えられる。

以上のことから、『尾張廻家苞』飯田秀雄書き入れ注の巻一（第一・二冊）については、その原態をうかがう上ではまず鹿島本に拠り、田中本との異同を確認するのが現状では適当かと思われる。本稿では、第一冊につき鹿島本を翻刻し、田中本との校異を示す形をとった所以である。

注

- (1) 『尾張廻家苞』飯田秀雄書入 巻一・巻二書入『加知弥神社飯田家資料稿9』（鳥取大学地域学部、平成二九年三月）、巻三・四書入『同10』（平成三〇年三月）。
- (2) 『御役所向諸日記』は『加知弥神社飯田家資料稿2』（平成二五年三月）による。
- (3) 『加知弥神社飯田家資料稿15』（令和四年三月）。
- (4) 山陰歴史館は所蔵資料の目録を一般には公開していないため稿者はその存在を知らずにいたが、原氏は旧蔵者から同館に『尾張』付注本を含む様々な資料が寄贈された際に、それらの調査を行っていたとのことである。
- (5) 拙稿『尾張廻家苞』飯田秀雄書き入れ本について―山陰歴史館蔵本

【翻刻 『尾張廻家苞』飯田秀雄書き入れ注 一之上】

凡例

一、底本には、山陰歴史館蔵本（下鹿島家旧蔵）を用いた。これは、飯田秀雄が石原正明著『尾張廻家苞』文政二年板本に書き入れ注を施したものの転写本であり、『尾張』板本に直接、注釈本文の行間や余白に注が書き入れられている。それに加え、貼紙や挟込紙片への注も多く、多様な書き入れがなされている。したがって今回の翻刻に当たっては、次のような方針で行った。

二、『尾張廻家苞』文政二年板本の翻刻

の紹介を兼ねて―」（『日本文学研究ジャーナル』第三一号、令和六年七月）。

- (6) 山陰歴史館整理番号「鹿島美彦家資料一 四・四二／四三」。上巻の外題に「詠草 上之巻」と記されるのみの和歌詠草二冊本であるが、すべて鹿島重正の筆跡により書かれ、少なからぬ所収歌が他書に見える重正の歌と一致することから、「鹿島重正和歌詠草」と呼称することとする。
- (7) 飯田秀雄『若山滞留中諸事留書』天保五年四月朔日に「故郷方書状来。カヘルベシト也。十八日認三月」とある。『加知弥神社飯田家資料稿13』（令和三年三月）参照。
- (8) 『美濃』『尾張』の本文は、『美濃の家づと』（石川泰水翻刻・解題）『新古今集古注集成 近世新注編1』笠間書院、平成一六年六月）／『尾張廻家苞』（寺島恒世翻刻・解題）『新古今集古注集成 近世新注編2』笠間書院、平成二六年一〇月）による。
- (9) 『石園歌話草稿』の本文は、『加知弥神社飯田家資料稿6』（平成二七年三月）による。

・『新古今和歌集』から抄出された和歌の詞書は二字下げ、和歌は一行書きで示した。

・『新古今集』の和歌には、歌頭に算用数字で新編国歌大観の歌番号を付し、歌の後の括弧内に『尾張廻家苞』の中での番号を漢数字で記した。なお、歌頭に「、」の記号が付されているのは、石原正明が『美濃の家づと』に漏れた『新古今集』の歌を、『尾張』において増補したものである。

・和歌に続く注は、底本では三字下げで記されるが、ここでは紙幅の都合により、和歌の後に一行空け、字下げ無しで示した。『尾張廻家苞』では、まず『美濃の家づと』の注を引用し、その後に石原正明の注が割書で示されるが、今回、原文に割注で書かれている部分は【 】で表記した。

・翻刻に際して語の清濁を改めた。句読点の位置はおおむね底本通りとし、適宜句点と読点に分け、明らかな欠脱部分は（ ）により補った。また、巻頭の石原正俊の序文、及び『新古今集』の各歌の詞書には、私意により適宜句読点や鉤括弧を施した。

・『尾張廼家苞』翻刻本文の作成に当たっては、寺島恒世氏による翻刻『新古今集古注集成 近世新注編 2』笠間書院、平成二六年一〇月）の方針を参考にさせていただいた。学恩に感謝申し上げる。

三、飯田秀雄書き入れ注（鹿島重正書写）の翻刻

・飯田秀雄書き入れ注の翻刻は二、の『尾張』注釈本文の後に傍注、頭書、貼紙、挟込紙片、の順で示した。本来は各丁表・裏ごとに『尾張廼家苞』翻刻本文を掲げ、そこでの傍注・頭書・貼紙・挟込紙片等の書き入れ状況を示すべきであるが、実際には『尾張』注釈本文や飯田秀雄書き入れ注が丁を跨ぐ場合も多いため、読解の便宜上、和歌一首ごとにそれらを整理して示すこととした。また、『尾張』巻頭の石原正明序文は長文であり、それに付された書き入れ注（主に頭書）も長文であるため、序文全体を八つに分け、それぞれの後に、対応する傍注、頭書を示す形をとった。このため、丁付の表示はすべて省いている。

翻刻の要領は以下の通りである。

・読解の便宜を考慮して語の清濁を改めた。底本では、書き入れ注に濁点が付されている場合とそうでない場合が混在している（田中穠旧蔵本ではおおむね濁点あり）が、私意で統一した。ただし、句読点は施していない。

・底本では書き入れ注には朱墨の区別がある。翻刻に当たっては、それぞれ赤字・黒字で示した。

・傍注は、注釈本文の該当箇所に赤字で括弧付き数字を施し、『尾張』注釈本文の翻刻の後に、一括して番号順に掲げた。底本では、傍注は『尾張』の注釈本文の傍らに注を書き込むだけでなく、傍線・傍点、括弧、囲み線や挿入記号など様々な表示が用いられている。それら注釈本文への書き込みは、翻刻に反映できるものはそうしたが、難しい場合には、逐一、

傍注の箇所で説明するか、補注に回すこととした。なお、本文の傍らに小さく「〇」印を付している場合は、すべて傍点で示している。（例、「に」

「は」）

・頭書は、各歌ごとにその位置や表記・内容から判断し、【頭書1】【頭書2】等と分け、傍注の次に一括して掲げた。頭書が一つしかない場合も、【頭書1】として記している。

・頭書の多くは、朱筆・漢字片仮名で表記される飯田秀雄のものであるが、朱筆・漢字平仮名表記のものは、底本に「仮名書ハ 紀州伊達千広 末同ジ」とあるように、伊達千広の注であると考えられる。特に、『尾張』巻頭の石原正明序文に対しては、頭書に長文の千広注があり伊達千広の和歌観をうかがう資料として注目されるが、翻刻の便宜上分割して掲げたため、【伊達千広注①】～【同⑦】と表示してその連続性に留意してもらえようにした。

・貼紙は「貼紙」、挟み込み紙片は「挟込」として表示し、それらが複数ある場合は番号で表示した。

・各歌ごとに「補注」として、底本と田中穠旧蔵本との異同を示した。

・「飯田秀雄書き入れ注」翻刻本文の作成に当たっては、田中仁氏による翻刻（前掲注1『尾張廼家苞』飯田秀雄書入 巻一・巻二書入『加知弥神社飯田家資料稿9』、巻三・四書入『同10』）の方針を参考にさせていただいた。学恩に感謝申し上げます。

四、翻刻に当たっては、原文の表記を尊重したが、最小限次のような処置を行った。

1 読解の便宜を考慮して語の清濁を改めた。

2 漢字の表記は、原則として通行の字体によった（俗字や略字は原則として用いない）。ただし、旧字・異体字などを部分的に残す（嶋・浪・湊）などはそのままとする。指示語や助詞・助動詞などの漢字もそのまま残した（此「哉」「也」など）。合字「𠂔」は「コト」、和歌の引用記号は「〳」で示した。

3 繰り返し記号「ゝ」「く」は原文のままとしたが、濁音はそれぞれ「ゞ」「く」で表記した。

4 不審な箇所には「ママ」と傍記し、読解困難な箇所は「■」、脱字と想定される箇所は「□」で表記した。

五、資料の閲覧、利用をご許可いただいた米子市立山陰歴史館、鳥取県立図書館に感謝申し上げます。

なお本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C））「近世後期の鳥取の和歌に関する資料調査と総合的研究」（課題番号 20K00359 代表・渡邊健）、山陰研究プロジェクト「山陰の文学・歴史関係資料の基礎的調査研究と発信・公開に関するプロジェクト」（二〇二二～二〇二四年度、代表・田中則雄）による研究成果の一部である。

（翻刻）

「尾張廻家苞 一之上」（題簽）

（表紙）

「伯州 鹿島 米子」（蔵書印）

（表紙見返し）

（尾張乃家苞序）

おのれ物の序に六度集経をよめる事ありき。其中に載たる鏡王経に、ある時王、目しひどもあまたつどへてとひ給はく、「いましら象といふものを見たりや。」こたへけらく、「ともに見たり。」王又とふ、「象はいかなる物ぞ。」其こたへ、足をもちしものは漆桶のごとく、尾をもちし物は掃帚のごとしなど皆おのがじしぐりし所のまゝにこたへて、「さて象は我らが申（^①）世しごときものにあらずや。」と申（^②）世しかば、王、「いまし目しひどもいまだ仏経といふものを見ずや。」とてわらひ玉ひき。こは釈尊の教のまじくなるを、諸宗の祖師たち其おしへの広くおほいなる事をえさとらでかたかど計を聞とりて是すなはち仏の正意なりとおのがじゝいひほこりて、衆生を導などするををかしとおぼしてかの瞽者の足をもち尾をもちて象はしかくゝのものなりとこたへしをわらひ玉ひしたとへ也。是誠にしかり。和哥の道も又かくぞ有べき。そはまづあがれる世の風を学びえんとおもふ人はいはゆる華嚴説法いと物遠きこゝちすれば、しばらくさしおきつ。さて、俊成卿定家卿を釈尊ともあがめ奉る和哥者流をはじめ、何の先生、くれの宗匠たち、彼象の足尾などさぐりえて是象なりと心得ていひほこる目しひのみ多かるは、釈尊ともあがむる彼両卿はいかにおぼしていかに笑ひ玉ふらんといたかはいたくなん。然るに、本居先生は世にまれなる博覧卓識の見解にて此集をしも論ぜられたる、尋常にはやうかはりていとめでたし。されど七宝蓮華のうちに十二音楽を聞がごとく、心ゆかず打かたぶくめるふしぐゝの多かるは、猶化土の機根なりしにや。おのれさきに江戸

に物せし程、をち正明にとひ尋ねしに、これかれしるしてくれられしは、かの目しひの目ひらきて、はじめて全象を見がごとしとやいはん。此教をえてこたへんには、鏡面王はいかにの給はせんや。正しくは、是なん至り浅き正俊らがためには、正定聚不退転などいふ位に住する心地して、誠に一乗の妙法には有ける。さて此文を年久しく櫃に納めてひめ置しに、かゝる導きゆゑよしをおのれ計さとりをらんは声聞縁覚なりとおもひおこして、片野の何がしにかたらひ、尾張の家苞と名づけて、桜木にえらするになん。哀此注さくの光明遍く十方世界の哥よみの衆生をてらして、済度のたすけともなれかしとてなん。あなかしこ、下品下生の物理学の(3)おしへにてはやく妙光をえたる諸先生のためにはあしかなめげにかくいふとなおもはれそゆめ

文政二年四月

石原正俊

(1) (2) 「せ」の左に除棄記号を付して右に「し」と傍記。

(3) 「お」の左に除棄記号を付して右に「を」と傍記。

補注 (1) (3) の書入は田中本になし。

【頭書1】

服子遷唐詩撰の附言にいへらく後世祖述唐人者家選戸論大抵宋人好自用其調絶響大雅即所选若論漆桶掃帚亦唯模索而已及南宋敵滄浪豁然眼目全象始見雖有来者不能間然云々此序一篇の趣意悉皆彼を模出せり然して子選が滄浪を評せるはさてもあるべし此家苞は玉石分明なるものも少きにはあらねど其発願の奥意は宣長を挫て我獅子の坐上らむとの結構なれば一片慢心の雲議論の上にむすぶれて真如の月影晴がたしかれば是も亦一漆桶にして全象未だ瞭然たらず然るを正俊子遷が議論を更に引出て正明をもて無上の菩提薩埵とするも又是一盲の漆桶にこそ

(飯田秀雄自序)

年平が物学びに国より来ゐて何くれととひける事どもの中に此集の哥どもの心ばへをなん殊にこまやかにとひたづねたるにさとしあげつらひたる趣を同じくは国にかへる家苞にかきしるしてみせよとこへるまゝにかきてあ

たふ

木国若山の旅のやどりにしてしるす

天保六年末三月

飯田秀雄

補注 ○子選が滄浪を評せるは子選が滄浪を評せしは(田)。○少きにはあらねど少きにはあらざれども(田)。○国にかへる一国にかへらん(田)。※服部南郭『唐詩選国字解』「付言」の本文では「惟」。

尾張廻家苞一

正俊が尾張の国より来ゐて、何くれととひける事の中に、新古今集の歌どものこゝろばへをなん、ことにこまやかにとひ尋たるに、さとしあげつらひたる趣を○おなじくは国にかへらん家づとに書しるしてえさせよとこへるまゝに○かきてあたふ。

万葉集古今集は、めでたき事はめでたけれど、今時よみ出る風には、時世あがりて打あはず。新古今集の其代の歌なん、打まかせたる則には有ける。

されど其歌意ふかくにほひあまりて、輒心えがたし。おのれさきに注尺(1)

(2) 二三種みつれど、皆いふかひなし。

(1) 美濃モ尾張モ十首ノ内七八首ハ是ニヨリテ解ケリイフカヒナシトハイカニ

(2) 北村季吟ガ抄 加藤盤齋ガ増抄等也 四冊抄

【頭書1】大矢ノ重門ガ物学ビに美濃ノ国ヨリ来居テ何クレト問ヒケル事ドモノ中ニ此集ノ哥共ノ云々以下同ジ

【頭書2】仮名書ハ 紀州伊達千広 末同ジ

【頭書3】伊達千広注① 凡歌のみならず一時の勢一家の識見は自然なるものにして是を改むとすとも改むべきにあらず是を学むとすとも学ぶべきにあらず唯物の知識におのれ生れえたる見識を磨くのみ

補注

(2) 四冊抄一ナシ(田)

【頭書1】田中本では、「美濃家苞 大矢の重門が物まなびに美濃の国より来居て何くれととひける事どもの中に 此集の哥どもの云々以下同」と漢

字平仮名表記。

【頭書2】田中本ナシ

【頭書3 伊達千広注①】○改むべきに―改るべきに(田)。○知識における―知識にあひておのが(田)。

唯本居先生のみのゝ家苞なん、さる英雄のたけく思てし出られたる事なれば、⁽¹⁾めづらかにめ覚る書なれど、むねと立られたる論に、しからずともはるゝ所ありて⁽²⁾、あかぬ事におもへりしかど其門人にも打かたぶく人これかれあめり。さやうに人のこゝろ付たる事にしあれば、我いはでもあるべしと、中ごろは打すて置つるを、かのかたぶくめるひとゞも俊成卿定家卿さばかりの名匠たちを、心にまかせてそしられたるを、よもしからじと綱ひくまでにて、取とめたる見解しなければ、そのまどひはひとつなり。正俊がもとめも深切なるに、さにあらんやはとて、しづ／＼に筆をとる事とはなりぬ。

(1) 是毛旧説ニヨリテ解カレニ間ニハ新説ヲ立ラレタルハ大方ワロキ方也

(2) コノ難注 的中シテメデタシ

【伊達千広注②】故孔子傍放れざる十哲も其性各異也能仁の座圍繞せる十大弟子も其才各差別有かゝれば萬葉は萬葉一時の勢古今は古今一時の勢人丸は人丸一家の識見貫之は貫之一家の識見なり新古今といへども又然り今の世の人萬葉を敬慕するも一家新古今に執着するも一家にして識見各執する所異なれども畢竟文政天保の氣勢はまぬかれがたしされば新古今をもて萬世不易の矩則とするも狭少の見識解といふべきか

補注

(1) 解カレニ―解カレテ

(2) コノ難注―コノ難注ニ

【伊達千広注②】○故孔子傍放れざる―故孔子の傍放れざる(田)。○各差別有―各□てり(田)。○矩則とするも―規則とするも(田)。○狭少の見識解―狭小の見解(田)。

かりそめのすさみにても、此先生の是非をいはんことはいとかしこし。⁽¹⁾さるは新古今集のころの歌は、一首の口調をめたくとゝのふる事を本意として、詞のうへに心をのこして、余韻を深くこめ、一首のつゞけま幽玄にして、あらはに浅まなる所なく、なさけをふかうし、語勢をいたはり、たけ高くも、しめやかにもつよくも、やわらかにも、⁽²⁾百般の姿あり。たゞしほ／＼くた／＼とするをきらひて、詩人のいはゆる⁽³⁾雄偉流暢豪壮新奇といふしらべを常にはおもひためり。かの新奇なるあまりに、こまやかに理をいはず、すこしいかにぞやとおもはるゝふしなきにしもあらねど、それはた瑕ありとも玉とならん事を願ひて、全き瓦をおもはざりし物也。此姿は文治より建保までの諸先達の後、地をはらひて見えず。

(1) サラバ此注認方モアルコトナルヲ出言無礼ヲ好テ書タルハ此文虚言ナリ

(2) 萬葉ト此集ト同体一致ノ論メデタシ

(3) カハルコトヲ学デ思ヒヨリタルニハアラズ時至リテ万葉風ニカヘリシ也

【頭書1】議論穿得デ妙

補注

(1) ナシ(田)。

為家卿なん、当時の名匠にて、世にゆるされたる歌よみながら、秀逸拔群なる歌は一首もなく、只ぢはうに凡様なるのみにて、縁の詞など取あつめ、上下かけあはする事をしおぼえて、終身一律の全き瓦なり。さるわざはまねびやすきけにや、末代⁽¹⁾この風のみ多し。本居先生は、古学者にて、万葉以下の書に熟して、めでたき才覚なれば、拔群の論もあるべきを、かのかけ合などいふことになづみて、此集をしも論ぜられたることなれば、たらひの水もて四大海の潮を論ずるがごとく、いたく堺を隔て、⁽²⁾気概くだりたり。上下のかけ合、縁の詞の配当を規矩にしたるは、為家卿の創立なれど、なを為家卿にあらそはむと、為家卿の執したる事にて、此集の縦横

磊落なるに日を同していふべき事にあらず⁽³⁾。

(1) 御堂風是ナリ

(2) 故先生ヲカク論ジタル正明ガ卓見見ルベシ皆縣居鈴屋ノ余沢ナリ

(3) メデタシトモメデタシ

【伊達千広注③】正明此集の気韻を論へるその真面目を穿得たれば誰か又異喙を開かむこゝに千廣も又此集に所見なきにはあらん故今此に論はむとす抑文治建保の間世に有がたき才識名匠一時に涌出して和歌の妙この時にとゞまれりさる中にも撰政の超卓五條三位の清麗京極黃門の奇巧壬生二位の韻致雅經参議の爽俊を先として金玉玉響志操千載を凌といひつべしかくて其真玉白玉をひとつづへにつらぬきてぞ此新古今の妙集とはなりける

補注

(1) 御堂風―御堂上風(田)。

(2) 卓見ルベシ―卓見ヲ見ルベシ(田)。

【伊達千広注③】○所見なきにはあらん―所見なきにはあらず(田)。○金玉玉響―金声玉響(田)。○一時に涌出して―一時を□出して(田)。

【此ついでに、彼両卿の門風の子細をいふべし。此論に至要なる事也。先上古の風体は姑さし置いて、古今集よりこなた、漸に今めかしく花やかにはなりたれど、その姿大かたは同じかりしを、白河堀河などきこゆる御代に、いとけざやかにけうがる。岩すへるみ山かたそばおりがたみ花まきあげよ谷の辻風(一)などやうの不思議なる事いできたり。さるは古今以来の風にあきて、新しくめづらしくよまんとこのわざにはあれど、いとけうとくすさまじげなり。こは俊頼基俊など事はじめして、数十輩の歌人、響の声に応ずるがごとく、皆其風にうつりし也。撰集には詞花金葉、大かたはなだらかにめでたけれど、その心ばへはまじれり。続詞花集も、准勅撰にせんと構にて選ばれたれば、めでたき事はめでたけれど、この習にひかれたりとおぼゆる事すくなくらず。されど撰集には異体なる哥の数も少く、ある

もきは／＼しきはをさ／＼みえねば、此心しらぬ人のめにはたゝぬほどの事なればよろしきを、百首歌合家集には、耳目をおどろかす事のみ多かり。俊成卿も、はじめはもはら其姿をよみ玉ひしを、さる哥の聖なりければ、かゝる姿はよろしからずと看破して、やさしくうつくしうよみ直し玉ひて、千載集はいできたり。その千載もなほ山口にて、文治よりつぎ／＼、其すがたを研究して、此集はなれりければ、千載は遮情の菩薩、新古今は表徳の如来なり。さるは三院あやしきまで哥のひじりにおはします。殿下はた世にしらぬ上手にて、百首歌合の催、日と月とのことなりければ、上をまねぶ人心にて、我おとらじとめづらかにをかしき事をいひ出んとはげみたる物なり。されば神代より末の世までに、此道の行はるゝ事、此時をさかりなりとす。一時の名匠三四十人、いづれ劣れりともみえざる中に、俊成定家ノ両卿ことなる宗匠なりければ、和哥はかの家の物のやうになりそめたり。

【伊達千広注④】故白玉赤玉一つ／＼を手にとりみればその色其光り各異なれど一貫する時は百人一物の新古今にて本末究竟一等といふべし是を一時の氣勢といふ故是を碎けば一家の識見是を集めば一時の氣勢是ぞ稽古の徒の眼を着て透徹の悟を得る妙処ぞや抑新古今一部一時の氣勢をいかにと見るいはまきはゆゝしともゆゝしくいとも／＼かしこかれど抑此頃に藤氏の威權年久しく末勢曾縞を穿得ず

かくて承久の乱いできて、三院所々に遷幸し玉ぬ。後堀河院と申は、さる事好ませおはしまさざりしにや、御百首御哥合といふ事をさ／＼きこえず。かゝりしかば、英雄の諸君子、たゞ魂をうばゝれたらん心地して、より所なかりしなるべし。かの乱の後の定家と隆の卿などの歌何くれとあれども、いといったうすさまじきのみなり。新勅撰集の此集に及ばざるは、時世の気を帯したる故なり。かくてこの道地に落て、年月へたりしを、後嵯峨院世をまつりごち玉しほど、再世上に勃興して、百首哥合など、何くれと数多かり。かゝりければ、又其世につけたる上手たち出来て、絶たる道を継し也。その上手たちの中に、為家卿は、俊成定家の孫子也ければ、世のおぼ

えよせおもき宿老なりしかば、たゞ此人ひとりをおもてにたてゝ、よくもあしくも其指揮に従ふ事となりぬ。世尊寺の筆道に家を立たる如く、歌道を家の業としたるは、此卿なんはじめ也ける。かくて此卿に子三人あり。太郎為氏、其子為世、御子左と号す。二郎為教、その子為兼、毘沙門堂と号す。三郎為相、冷泉と号す。冷泉は此論に用なければ、姑さし置くべし。御子左の流は、為氏為世打つゞきていとめでたき歌よみ也。さるは為家卿の風骨にて、俊成定家の氣韻には遠く及ばねども、さる所せき規矩の中にゐて、滞なくよみたる物にて、結句は為家卿よりもすぐれたる所なんみゆる。又其門に頼阿といふ上手ありて、其風の勢を揮し也。毘沙門堂の流は、為教卿上手にて、為氏卿にも劣れりといふけぢめふとしもみえわかず。其子の為兼卿も、また一時の名匠にて、いといきほひある哥よみ也。此風は、為家卿の持法なるをきらひて上二代の風口^マに心をかけたれば、すこしく氣概はあるに似たれど、あやしきくせある風にて、御子左にまさらず。まさらねどこれも一家也。

【伊達千広注⑤】

平相国修羅の瞋慢帝釈の軍に利を得て滔天の勝さびいとかしこかりしも一変して四海鎌倉右幕下掌握せられしより天津日の御影狭霧いぶせく又吹払ふ科戸の風も出来ねば一時朝廷の名臣達納言三木の差別なく唯朝廷の儀式司にして百餘の才識大御政の上に及ばず此時に無知の凡夫はいかにせんいさゝかも心あらんからは此うれたみに堪へけんや

玉葉風雅とていみじき物にいひおもふは、御子左の遺言なれど、さのみはいかゞあしからむ。野守鏡井蛙眼目などにそしられたるは、我かた引たる論説なれば、その心してみるべし。かくて御子左は、為氏為世と打つゞきて、和歌は只我家の物となしはてたるに、同流にさる物の上手いできて、撰集をもうけ玉りし事なれば、家門の嫡庶のまぎれもいできぬべくて、周章したるもの也。群書類従にいりたる陳情をみてしるべし。さるまゝに幾千種の偽書をつくりて、毘沙門堂にてもてあそぶ言葉どもを、しかゞと

はよまざる事、しかゞとはこひねがはざる事といひて、定家為家の両卿に託して、其説を主張して、為兼卿の説を防ぎたり。此両卿は、かの家の系別の祖なれば、必拠べしとおもひて也。世上の歌よみに、草庵体とて、持法なるがあるは、其風の名残也。かくて為兼卿は其家つゞかず、為世卿は、為藤為明為定為通等の卿皆めでたき歌よみにて、つひに此風に一致したり。一致したるうへは、かの風の詞の禁忌もゆりたりけんを、今にいたるまで、その余習にひかるゝ事もあるべし。大かたの人はさてもいかゞはせむ、本居先生は、世にめでたき物しりにて、かゝる子細をわすれて、草庵体といふ風になづみて、偏小なる論せらるゝはいかにぞや。】

【伊達千広注⑥】これぞ此集一時の氣勢にしてその心情声韻の上に露顯し一部中の透逸是を吟じ是を味ふに十に八九はその氣悲壯凄惋なり故打あぐるほどに声調人の腸に透徹してすぐる寒き心地する是たゞその歌の妙調奇韻のみならず時勢感慨の氣を帶れば也あはれ今の世語意をあなぐり詞の末にかゝづらふ生學生らはいかにもあるべし宣長の英雄正明が奇才なる其論こゝに及ばざるはいかにぞや古学者の歌よむは抑何の為ならん

補注

○一部中の透逸——一部中の秀逸（田）。

そは皆普通の小理なれば、凡人の機根に相応して、げにとふかくおもひしめぬべければ、大きな道のさまたげ也。正明尾張にゐたりし比、詠草まいらせて、歌なほして玉はらんとこひ申たる事ありき。ほどもなく江戸に来て、今の先生の教にしたがひしかば、^①恩をうくる事日浅しといへども、猶そのかみのことは忘れず。さるほどに此先生の是非をいはん事はいとかしこく、議論の末には^②なめげなる事もや出こんと、^③いと憚あれど、水底清き此集の流に、みくさのふたがらんはくるしかるべければ、わがいひしことのあしからんにはなしたがひそ、あげつらひ定てよきにしたがへと、教置れたる事もあり、岡部の翁のあやまりを糺しもどかれたる、事の迹もしるければ、^④さりともあしとはおぼさじとおもひ起してなん。あなかしこく。

(1) 江戸ニ居テモ尾張居テモ先生ノ書ヲ見テ学ビタルナレバ恩ヲ受ルコト日浅シト云コトナシ

(2) ナメゲニモウヤマヒテモカゝルヲワザトナメゲニカキタリ

(3) 偽言ナリ

(4) 此述ニ随ヒテ真心ニ解ベキコトナリ

【伊達千広注⑦】又曰宣長千古不出の英雄古義の大博士にして気千載を凌ぎて世を睥睨せることは周公孟子を論ぜるもて知るべし故その余勢こゝに及びてさしもの名匠を心にまかせて咀嚼をし材力自然の英気を充し正明青藍の才もて宣長を当敵とし雄弁を振ふて彼を挫むとすされどいひ過しては公平の説を得がたく鹿追さつ男の谷に陥る比類も少なからず抑揚諫勸後学の眼は驚かせども散睡いまだ宣長をして羊とはなしがたからん 又云宣長は俊成定家の諸匠と争ひ正明は宣長と争ふ乃是両雄優劣の分明なる所なり

【頭書1】以上弁舌ヲ以テ人口ヲフセガントスル罪アサカラズ 鈴屋翁ノ御蔭ニヨリテ此集ノ粉骨ヲ見出テ美濃ノ誤解ヲ改後進ヲ導タルハイカニモヨロコビ玉フベキコトナレドモ其慢心ニツノリ戒心ヲムネトシテ師タル人ヲ敵ノ如クツケネラヒヤゝモスレバ歌ノ解ヲ傍ニシテ奴僕ヲ匄ルゴトク大言ヲ事トシカニカクニオノレタケク云ホコリテアク迄無札ヲナシタルコトハナドカハニクミ玉ハザラン鈴屋翁縣居翁ノ誤解ヲトキ直サレタルゴトクニ慢心ヲステ、解ベキコト也

補注

(1) 尾張居テモ—尾張ニ居テモ(田)。

【伊達千広注⑦】〇さしもの名匠を—さしも名匠を(田)。〇咀嚼をし—咀嚼せし(田)。〇英気を充し—英気と云ふべし(田)。〇正明青藍の才もて—正明青藍の才をもて(田)。〇抑揚諫勸—抑揚諫勸(田)。

【頭書1】この注記は本文余白に記されているが、頭書に続く部分として扱う。

〇鈴屋翁—鈴翁(田)。〇誤解を改—誤解を改め(田)。〇歌ノ解ヲ—歌ノ解ヲバ(田)。〇アク迄—カクマデ(田)。〇鈴屋翁縣居翁—鈴翁縣居(田)。

〇トキ直サレタルゴトクニ—トキ直サレタル如ク(田)。

新古今集

春歌上

春たつ心をよみ侍ける

摂政太政大臣

1 みよし野は山もかすみてしら雪のふりにし里に春は来にけり(一)

初句はもじいひしらずめでたし。【此上に、めでたし、詞めでたしとあり。されど、此集の哥いづれか(1)めでたからざらん。(2)とりわきてほむるは中となるわざなれば、今みな略くべし。】(3)のやともあらんはよのつねなるべし。【まづ此御歌は、大かたはみよしのや山(4)はかすみて白雪のふりにし里も春は来にけりとあるべきが如くなる哥なるを、三吉野や山と重畳したるが、語路の宛転に聊あかぬ所ある故(5)、はとし玉へり。此例此集の比これかれあり。(6)別に注すべし。古人の調に心を用ひたる事大かたならざる事をみるべし。さてみよしのゝとはいひがたきに、山ものもゝじ大切なりければ、下にいふべき(7)もゝじを、こゝにいひて、山もかすみて、(8)此ころまでしら雪のふりし里にも春は来にけりと、四の句へもひゞかせたる御とゝのへさま、いみじうめでたし。山はといひては、故郷はかすまで、春ともなきが如くなる勢にて、※いとわろし。畢竟は(9)口調をいたはるために、枉てはとの玉へるなれば、はもじはほめ奉る事もなし。下にいふべきもゝじを(10)上にいひて、めでたくとゝのへ玉へるなれば、(11)此もゝじをこそほめ奉るべくは有けれ。又みよし野のといはんは、芳野と故郷とこと所になりて、いとわろし。おのれ国にありし比、此先生なごやへ物せられて、哥の会ありし時、足柄の関の八重山ほのぐと朝霧ふかき(12)竹の下道とよみつるを、足柄やと直されて、足柄のといひては、竹の下道足柄とはこと所にきこゆるぞと教られき。今偶此論を立るも(13)、猶故先生の遺沢也(14)。一首の意は、みよし野では、山もかすみて、此ころまで雪の降り故郷にも、霞が立て、春が来たるけしきぞと也。白雪はふるさとの序のやうにて、近日までのふりし事をもたせたる也。(15)】

(1) メデタカラヌ哥モアリ

(2) ヨキアシキヲトリワキテホメモシ難ジモスルガ達者ノワザナリ

(3) の・トモや・とも云テハトノハザレバヨノ常ノ哥ニモナラザルナリ

(4) 「や・山」として傍注「カヤウニヨミ玉ハンノ意ハモトヨリナカリシナルベシ」。

(5) 何ノサルコトノアラン穿タル説ナリ

(6) 語路ノアシキヲキラヒテ転ジタルテニヲハアル哥ノ例此哥ニハ不用ノコト也

(7) 下ニ云ベキニアラズ

(8) 「此ころまで」に「」を付して傍注「誤解也」。

(9) ヨミ主ノ心ニサラニナキコトナルベシ

(10) 是ニハアラズ

(11) 古抄ニもノ字ヲ働カシ玉フ奇妙トイヘリ是ヨリカク云ナルベシ

(12) 「ふかき」の「き」に「○」を付して傍注「フカシト切テヨムガヨロシ」。

(13) カク思ヒナガラ言出スベキコトカハ

(14) 甚シキ弁傍也此コト下冬ノ部西行ノ歌ノ所ニ弁ズ

(15) タガヘリニシヲ雪ノ方ニツケテ見ルベカラズ故郷ノ方ニツケテイヘルナリ

補注

(4) ヨミ玉ハン―ヨミ玉ヘル(田)。

(6) 不用ノコト也―不用ナリ(田)。

(11) 是ヨリ―是ニヨリテ(田)。

(12) 田中本ナシ。

(14) 下冬ノ部―二ノ下冬ノ部(田)。

田中本では、※印を付した「いとわろし」への傍注として、「アシキニヨリテサハヨミ玉ハヌヲミヅカラアシク引マゲ置テ又ミヅカラソレハワロシト云ハ何事ゾ空論ノヒトリゴト也カ、ル言ザマサキドニアリ」とある。

【頭書1】拾遺巻頭 本歌 春たつといふ斗りにやみよしのゝ山もかすみ
て今朝はみゆらん

此本歌ヲヨクトリ玉ヘルモノナリ

【頭書2】は・モジハ一首ニ行オオブテニヲハニテ山里ハ冬ゾサビシサマサ
リケル也へサビシハ其色トシモナカリケル也へ吾恋ハ松ヲシグレノ也へ霜
ガレハソコトモミエヌ草ノ原也ナドアルニ同ジコトニテ山家集ニモ三吉野
ハ春ノ霞ノタチドニテ云とナドアルニ同ジクメヅラシキヨミナシト云マデ
モナク常ノコト也モジは本歌ノ一句ナレバ論ナシサクラ花今ヤ咲ラン三
吉野ハ山モカスミテ春雨ゾフル鳩ノ海ヤ今日ヨリ春ニアフ坂ノ山モカスミ
テ浦風ゾフクトアリカク古歌ノ一句ヲトリテヨメル此集ノ頃殊ニハヤリシ
コト見エテ六家集ナドニ例多キヲ見ルベシ歌ノ達者ハサヤウノ所ニ心ヲク
ルシムモノニハアラザルベシ ハ・モジモ・モジ両苞ノ説大方ハイタヅラゴト
也 ハト云モト云テニヲハノ連続ノ間ニ言靈ノ妙ソナハリテ歌ヲナシタル
ナレバイズレモ同ジコトニテ大切ナルテニヲハナルヲハハワロクモハメデ
タシトイヘルハ歌ヲ傍ニシテミノ、説ヲウタンノミスル妄説也 此歌ハ忠
岑ノ歌ヲトリテノ反歌ノ如クニヨミ玉ヘルガ粉骨ナルヲアラヌ論ノミ見ユ
ルハ歌ノ為イト／＼ロヲシキコト也

【頭書3】「此ころまで雪の」「近日」を赤線で囲み、それに対して以下の
注を付す。「此頃迄シラ雪ノフリシ里此頃マデ雪ノフリシ故郷ニモナドイヘ
ルハタガヘリ 白雪ハフリト云マデニカハリテニシハ故郷ノ旧ノ方^{フル}へ用ヒ
タル也 白雪ノフリニシ里ト云テ雪ノフツテアル故郷ト云心ニ用ユル云カ
ケナリ

一首ノ意ハ古哥二三吉野ノ山モカスミテケサハ見ユラントヨンデアルガ其
通りテ山モカスンデ雪ノフツテアル此吉野ノ里ニ春ガ来タワイト也 本哥
ノ反シノ如シ此詠格多シ」

補注

【頭書1】此本歌ヲヨクトリ玉ヘルモノナリ―此本歌をよくもとり玉へるもの也。(田)

【頭書2】○冬ゾサビシサマサリケル也―冬ゾサビシサマサリケル云と(田)。○ハサビシハ其色トシモナカリケル也―サビシサハソノ色トシモナカリケリ云と(田)。○ハ吾恋ハ松ヲシグレノ也―我恋ハ松ヲシグレノ云と(田)。ハ霜ガレハソコトモミエヌ草ノ原也ナドアルニ―霜ガレハソコトモミエヌ草ノ原云とナドアルニ(田)。○同ジクメヅラシキ―同ジクテメヅラシキ(田)。○ハヤリシコト見エテ―ハヤリシコトトミエテ(田)。○心ヲクルシムモノニハ―心ヲ苦シムルモノニハ(田)。○ハモジモジ両苞ノ説大方ハイタヅラゴト也―田中本では、この一文がこの後の「妄説也」と「此歌ハ忠岑ノ歌ヲトリテ」との間に位置する。○ウタンノミスル―ウタントノミスル(田)。○反哥ノ如クニ―ソノ反歌ノ如クニ(田)。

【頭書3】○其通りテ―ソノ通りニ(田)。

春の始の御歌 太上天皇御製

2 ほのぐと春こそ空に来にけらし天のかぐ山かすみたなびく (二)

初御句かすみたなびくへかゝれり。二の御句へつゞけてはこゝろうべからず。【かくの如し。】空とあるを重く見て、山の名の天といふと相照して見べし⁽¹⁾。【山の名の何となく御一首に相応したるなり。一首の意は、天のかぐ山にかすみがたな引たるは、春が虚空に來たらしいとなり。初句は霞の事なり。】此の集の比のうたは、⁽²⁾ すべてかゝる所に心をこめたる物なり。【天と空とかけ合たりとてかくいはるゝか。其かけ合といふ事は、為家卿の無骨にて、歌をくみたつる術也。此集の比は自在なれば⁽³⁾、たてゝ照応を云べからず。】

(1) 以上古抄ノ解

(2) 「すべて」を「」で括つて傍注「スベテトイハル、ガワロシ」。

(3) 尾張見解此所也メデタシ

【頭書1】古抄天ト云ニ空ニトヨマセ玉ヘル上下カケ合タル御歌トゾトアリ美濃ハ此説ヲトラレタルナリ尾張山ノ名ノ何トナク一首ニ相応シタル也ト云ルハアタラズ

月清岩戸明ケシ神代モ今ノコハチシテホノカニカスム天ノカグヤマナド多ク天ト云ヲ趣意ニヨメリ古抄ニ随フベキ也

補注

【頭書1】○御歌トゾトアリ―御歌ゾトアリ(田)

百首哥奉し時春の歌 式子内親王

3 山ふかみ春としらぬ松の戸にたえぐかゝる雪の玉みづ (三)

春⁽¹⁾としらぬ松とつづきたるも、趣の外の余のほひなり。【秋としらぬ松とつづきたらばこそあらめ、春としらぬ松に、いかなる句ひかこもるべき。まつの戸はたゞ柴の戸といふも同じ事也。一首の意は、都ではさまぐに春めいた事であらうが、こゝは山が深さに、春といふ事は何もしらねど、松の戸に雪どけの玉水がたえぐかゝる故、春かと思ふと也。かやうの哥のめでたきはうちよみたるしらべのめでたき也。ことなる趣意あるにはあらず。世上に新古今集をたくみ也といふ。それも一ツの姿なれど、此御歌のやうなるも常にあり。畢竟は姿やさしく、調高きをもて、一貫の論とすべし。】⁽²⁾

(1) 古抄ノ解

(2) 此説メデタシ此御哥万葉風ノ姿ニテツヨク雄々シキコト限ナシスベテ御哥如此内親王ノ御身ノ上ニテカク勇勢タクマシキ御哥ヨミ玉ヘルコト不思議ナルコトニアラズヤ 又今ノ世ノ歌ノ女々シクハカナゲナルガハツカシキコトナラズヤ

【頭書1】古抄春トモ知ラヌ松ノ戸トツヅラレタルハ松ハ常磐ノモノニテ春夏秋冬共知ラヌヨシ也トアリ美濃ハコレヲトラレタルナリワロシ

【頭書2】尾張ノ説ヨロシ

美濃ニ趣ノ外ノ余ノトイハレタルハ巧テヨミ玉ヘルニハアラズト云コト意カ自ラシカ聞ユルト云意カスコシ聞取ガタシ

補注

【頭書2】○云コト意カ―云意カ(田)。○趣ノ外ノ余ノト―趣ノ外ノ余ノニホヒ也ト(田)。

五十首歌奉し時

宮内卿

4 かきくらし猶ふる郷の雪の中に跡こそみえね春は来にけり (四)

四の句雪のなほふる故に、来つる跡は(1) なけれども也。【春の来たるあとの事也。】春はといへるに、人は来ぬ意あら(2) はれたり。【はもじに其心はなし。人の来る来ぬといふ事、此歌に(3) 用なき事也。】

(1) 此注ノ如シ

(2) 以上古抄説

(3) 是ハ余韻ニ見エテ用有

【頭書1】古抄ニ人ナドノ来タルニハ雪ニ跡アルニ春ニハ跡ナキ意ナルベシトアリ

【頭書2】故郷跡来ナド皆人ノウヘニツキテ云詞ナレバ人ハ余韻ニヨク顯レタリ其ヨミ廻シタルガ哥ナレバ用ナシト云ベカラズ

【貼紙1】雪ノナホフル故ニ来ツル跡ハナケレ共春ハ来タワイトイフ也春ハト云ヘルニ人ハコヌ心アラハレタリトアレ共シカ見バアトコソミエネモ人ノ方ヘカケテ心得ベキカ

補注

(2) 以上古抄説―以上古抄(田)。

入道前関白右大臣に侍ける時百首歌よませ侍けるに立春のころを

皇太后宮大夫俊成

5 けふといへばもろこしまでも行春を都にのみとおもひける哉 (五)

二三の句、かの大式三位が歌とはやうかはりて、くちをし。【(1) 大式三位歌ははるかなるもろこしまでも行物は秋のね覚の心也けりと有。(2) 此哥の詞をとりてはあれど、たゞ同じさまにめでたきを、くちをしとは何故ならん。】立春の歌に行春とはいかず。三月尽の歌にもなりぬべし。【まで、といふことばにて、三月尽の哥とはならず。】これらもよさまにたすけていはいふべけれど、今人のかくよみたらんには、誰かゆるさむ。【人はしらず、正明はいとめでたしと申べし。】など立ッ春とはよまれざりけむ(3)。【もろこしまでもたつ春といふつゞけやは有べき。までもといふ詞に心づかれざりしにこそ。例は精細にのみあるを、こゝはたまゝ疎漏なり。春は從レ東到といへば(4)、あづまよりみやこまでは来る春なれど、なほそれよりも西の国とに行わたり、もろこしまでも行とゞく春なれば行春といはでいかゞいはん立春の哥に行春とはいかにとあるもふと一ことば打きゝてはげにさる事なれど父は祖父の子なるを父をさして子とはいかにとがめたるが如し。】までもといふ詞に祖父の子とことわりたればすべて難なき哥なり。】

(1) 増抄引歌ニ出

(2) 増抄ニ此哥ヨリ思ヒヨレリト見エタリ 行ク物ヲカヘタル也トアリ

(3) 以上美濃ノ新説也ワロシ

(4) 増抄ニヒケリ

【頭書1】美濃ワロシ 尾張ヨロシ古抄ニヨレリ

【頭書2】但シ此ミノゝ注理ヲサキニシテ一首ノ風致ヲ忘レタル論也トテ荒木田久老ガハヤク難ジタリ

【頭書3】鈴屋翁テニヲハノ道ト云コトヲハジメテ解正サレテ其法則ニ取入ントノミ構ヘテ歌人ヲ取立ラレタレバ歌ノ氣込ニハ自ラウトカリシナリテニヲハモ至要ナルコト勿論ナレ共歌ハ一首ノ氣込テ風韻ヲ見ルコト第一ナリ

補注

(3) ワロシ―モトヨリワロシ(田)。

【頭書3】○氣込―氣込イキゴミ（田）。

題しらず 西行法師

7 岩間とぢし氷もけさはとけそめて苔の下水道もとむ覧（六）

初句もじあまりいと聞ぐるし。○此法師の歌。○此病つねにおほし（1）。【もじあまり聞ぐるしとは、毘沙門堂家の歌を御子左の風より（2）そしりぐさにせし其常談ののこれる也。げに玉葉風雅などには、うれしとも一方にやはながめらるゝまつ夜にむかふ夕ぐれの空などやうにいたう口ごはきもまじれり。そは玉葉風雅の事にこそあれ、此集の秀歌にあてゝ論ぜらるゝはしひたる事也。これらは口ごはき所もなし。字あまりをあしといふは語路の婉転のわるきをいふ也】道もとむらん、よせなし。されどかゝる所此法師の口つきにて、こと人はえいはぬ事なり。【道もとむらんよせなしとはいかに。こゝは苔の下水のながれ行方をもとむる意なり。上句にかけ合なしといふ事歟。岩間とあるが即水の道なる物をや。かゝる所（3）此法師の口つきにてこと人はえいはぬ事なりとあるも心えず。水は非情の物なるに、道もとむらんと情あるものゝやうにいひなしたるは此集の頃のたくみなり。此上人は時好にひかれず真率なる哥のみ多かるを、これはいとめづらかなる物をや。一首の意は、岩間をとぢた氷がけさからとけそめた故、苔の下水となりてながれ行方を求めるであらうと也。（4）】

（1）ヨロシ

（2）モジアマリヲコレニトリ合セテ云ヘルハクハシカラズ別ノコト也

（3）此哥モ無念ナリ玉ニ疵トハ此コト也 歌ノヨキハヨキ疵ノアルハワロキニテ別ノコト也 歌ハ秀歌ナルベシ

（4）古抄ノ解ナリ

【頭書1】字余りをあしといふは語路の宛転のわるきをいふといへる然りすなはち此初句宛転なだらかならず岩間のまと閉しのとのあひだ語路切るゝ如く打あげて歌むには歌やはらかならぬこゝちすされど一首拔群の秀

歌にして是ばかりの事は疵とすべくもあらず 尾張の攻撃論得たりといふべし

【頭書2】尾張ヨロシ 非情ノ物ヲモ有情ノモノ、ヤウニヨミナスハ神代ヨリ歌道ノ雅心ナリ此集ノ頃ノ巧トハ何事ゾ

【貼紙1】道モトムラン詞ノ上ノヨセハアラネド今朝ハとけそめてトイフニテ水ノナガレソムルニ姿アラハナレバ結句イサ、カモ難ハアラジ一首ノスガタイトメデタシ

【貼紙2】モジ余リハ漢字三音考字音仮名用格ニ弁ゼラレタルゴトクアイウオノ四母ヲ離レテ他ノ行ヘウツリテハオノヅカラ音調ミダレテ聞グルシク畢竟ハテニヲハノタガヒタルモ同ジコトナルヲ今ノ哥人ヤ、モスレバ是ヲ犯シテヨムハ何ゴトゾ 鈴屋翁ノ説非ナルコトヲ考得ザレバ必ズ犯スコトナカレ

補注

（1）田中本にナシ。

【貼紙1】とけそめて―トケソメテ（田）。

【貼紙2】鈴屋翁―鈴翁（田）。

述懷百首に若菜 俊成卿

15 沢におふる若菜ならねどいたづらに年をつむにも袖はぬれけり（七）

【みのゝ家づと注なし。聞えやすき歌には注なき例なり。されど今は猶いはむとす。いたづらに年をつむとは、官位などすゝまず沈淪して年をふる也。一首の意は、沢に生たる若菜をつめば沢水にて袖をぬらす、さうではなけれども世にしづみて年をつむにも袖はぬるゝ物ぞと也。（1）】

（1）増抄ノ説ナリ

日吉の社によみて奉りける子日の哥 （俊成卿）

16 さぐなみや志賀の浜松ふりにけりたがよにひける子日なるらん（八）

〔1〕子日の哥とはきこえず。【松を体によりて、子日は用なる故、しかいはるゝ也。これを傍題といひていみじき病とするは、為世卿のわざなるべし。

傍題は病なるが如くはあれど、なほ此集の比までは数多みえて、哥合にも難とせず。此集の中にもこれかれありて、ひとつの哥也。今も此集に心かけむ人、まれによみたらんもつみなき事也。】下句たが世の子日にひけるならむといふべきを、【かくいひては世といふもじうきてきこえず。よみのまゝにてきこえたるうたなり。たが世とはいつの時代といふ事とだに心うれば滞る所なし。】さはいひがたき故にかくいへる、常ある事なり。されど子日は引べきにあらざればいかゞ。【志賀の浜松は、いつの子日に引し松ならんと、松と云もじをこゝへもひゞかせたる、此集の比のたくみにて、数しらず多し。常ある事とあれば、深き難とはおもはれざりけむ。】

〔1〕子ノ日シテヨミタルニアラズ神ニヨミテ奉ラレタルナレバウハサノ子ノ日ニテモヨロシカルベシ 傍題ニハアラズ

〔2〕常ニアルコトナリトハ常ニ初心ノ云コトニテワロシトイハレタル也

【頭書1】傍題を難とせずまれによみたらんもつみなき事とは何事ぞやつみなき事ならばつねによむとも罪なかるべく罪有る事ならばまれによむもつみなるべし英雄欺人とはこれらの論也 一首の意志賀の浜松はいつの子の日にひきし松ならんといふことゝは聞ゆめれど巧に過ていとむつかし此評尾張の鈍鈍くして美濃の陣脚動きがたし

【頭書2】此歌或人云子ノ日ニ根延ヲ云カケテ誰ガ代ニヒケル子ノ日ノ松ノ根ノビタルナランノ意ナルベシトイヘリ

後拾遺 君ガウエシ松斗リコソ残りケレイヅレノ春ノ子ノ日ナリケン此哥ヨリ出タルベシ

両苞ムナシ古抄ヨロシ

補注

【頭書2】根延—根延ネノヒ（田）。

17 谷川のうち出る浪も声たてつうぐひすさそへ春の山風（九）

本歌、谷風にうち出る浪や云と、【谷風にとくる氷のひまごにうちいづるなみや春の初はな。】風の便にたぐへてぞうぐひすさそふしるべにはやる。【梅が香を風の便にたぐへてぞ云と、といふは本歌の詞ばかりをとれり。】これつねの事也。〔2〕先生は本歌の如く云といはるゝ例なるに、こゝは然らず。〔3〕波も声立つるほどに、鶯をもさそひて声立させよと、山風にいへる意也。

〔1〕詞斗リニテハキコエヌ哥也

〔2〕一首ノ意ヲ取モツネノコトナリ

〔3〕サシ、レタルコトナレバイワレザル也

和哥所にて閑路鶯といふ事を

太上天皇御製

18、鶯のなけどもいまだ降雪に※¹杉の葉白し逢坂の関（二〇）

【此御歌、雪をむねとよませ玉ひて、鶯はかりそめなれば、いはゆる傍題なり。傍題は、古人難とせざりし事、志賀の浜松の所に委しくいひつ。みのゝ家づとに此御歌もれたり。さるは帝の御歌は難じ申されざる事なるに、傍題をいみじき難とおもひて、※²よしなしとて除かれたるなるべし。みのゝ家づとに洩たる哥を、今くはへたるは、上に点をくはふ。下これにならふべし。一首の意は、鶯がなけば、春ではあれども、やはりまだ雪が降て、相坂の関の杉村が真白なと也。】

【頭書1】子日は小松を引遊ぶがつねなるに浜松のふりたるを詠れたれば悉皆名所の松也是は雪をむねとなる如くにも見ゆれどなけどもいまだ雪はふりつゝの意にて春猶寒き閑路の鶯を詠賜へるなれば全く傍題ともいひがたく子日と並べいはんはいとかしこかるべし

補注

※1 田中本では「杉の葉白^キし」のルビ「き」の左に「ゝ」を付して傍注「杉ノ葉白シト切レタル方ヨロシ」。

※2 田中本では「よしなしとゝなるべし。」に傍注「サル心ガマヘハナカリシナルベシ此外ノセラルベキ哥ノ多クモレタルヲ思へ」。

【頭書1】○雪をむねとなる如くにも―雪むねとなる如く(田)。

家の百首歌合^ニ余寒 撰政

23 空はなほかすみもやらず風さえて雪げにくもる春夜の月(一一)

初句の猶といふ詞は、三四の句へかゝれり。もし霞みもやらずといふへかけていふ時は、まだといふ也。これにて猶とまだとのけぢめを心得べし。

【みなさる事なり。】霞にくもるべき春の月の、雪げに(一)くもると也^{※1}。

(2) 月はたらかず。【空はなほといふより、月の心はいとよく貫通したるを、はたらかずとは、いかにいはるゝにかあらん、心えがたし。もし上の句に、影とか光とかあるべしとおもはれたるにはあらざるか。空とばかりにては猶あかざりしにや。一首の意は、空はえかすみもせず、風がさえて、春の月が、雪げにくもりて、朧なるよと也。さてみのゝ家づとに、詞書を省かれたるが、拙なげなるもあり、作者の署名を書改られたる、ずちなき様なるもあれど、歌にあづかりたる事ならねば、旧貫にしたがひて、今論せず。新加の哥もこれに准じて物しつ。【又みのの家苞の文も、させることなきははぶく。事ながきをいとひて也。下これにならふべし。】

(1) 古抄ノ解也

(2) 新説ワロシ

補注

※1 田中本では「雪げにくもると也」に傍注「四句にて然聞ゆ」。

和哥所にて春山月 越前

24 山ふかみ^切猶か^切げ寒^切し^切春の月^切空かきくもり^切雪はふりつゝ^切(一二)

春の意はたらかず。なほをすむ、春をよはなどかふれば、冬の月のさま也(一)。¹【すべて哥は、一もじにいくばくの意をもこむる物なれば、もじをかへて余の題にならんは、難にあらず。みし玉だれの中やゆかしきとある歌の、やもじをぞもじにあらためて、かへしとしたるためしもなくやはある。ましてかうもじ多くかへむには、いかなる意にもなるべき也。此哥、みの字猶の字と眼にて、山が深さに、やはり影がさむいといひて、なべて世上はのどかにかすめる趣をおもはせたれば、春といふもじなくとも、春の歌也。冬の月のさまなりとはいかず。此集の比は、詞のうへ幽玄にて、余情ある哥多し。浅まに見てはたがふ事也。一首の意は、世上はのどかにかすむ比なれど、こゝは山が深さに、春の月かげが寒い、其うへ空がくもりて、雪が降て、すべて春のやうでもない也。】

(1) 以上新説ワロシ

【頭書1】月影春冬の論はしばらくおきつ一首幽玄の妙何処にあるらん畢
竟集中の小乗禅のみ

【頭書2】尾張ヨロシ

詩をつくらせて哥にあはせ侍しに水郷春望 左衛門督通光

25 みしま江や霜もまだひぬ^切芦葉につのぐむ^切ほどの春風ぞふく(二三)

二の句は、霜のまだ消ぬをいへるか。【此こゝろなり。】然らば芦の角ぐむ計の春風のふかむ^ニ、霜のきえぬこといかゞ。【百草のもゆるほど霜の置事常ある事なれば、それはあやしくもあらず(一)。又芦の角ぐむばかりの暖風は吹たりとも、風にて霜のきゆる物にあらねば(2)、此難はいかにいはるゝにか。】又ひぬとは既に解たる跡のいまだ乾かぬをいへるか(3)【かく窮屈にみるべからず。是は霜のいまだとけずしてあるも、既にとけていまだ乾かざるも、あるべし。さる差別をおかず、皆一にして霜もまだひぬといへる也】さては俄に春めきたるさまはさる事なれども、とけていまだひぬを、たゞ霜もまだひぬといひては詞たはらず(4)【霜は露の結びたる物なれば

霜もまだひぬといへる也。かばかりの事難とすべからず⁽⁵⁾。されど玉葉風雅の濫觴なり。庶幾する姿とはいひがたし。一首のさま、む月つごもり、二月ついたち、朝明のほどは猶いと寒きに、日かげのどかにさしのぼり、暖かなる風ゆるく吹て、霜もきえ、草も萌る、常ある事也。其心してみたらんには、霜もまだひぬの、先生の難を免るべし。⁽⁶⁾【四の句ばかりのといふべきを、ほどのといへるは、いやしき詞にちかし。】⁽⁷⁾此二ツ一向に通用す。いかでかいやしき事あらん。】

(1) ヨロシ

(2) 暖風ニ霜ノキエルモノ也

(3) 実景トミラレタル一条也

(4) 此集ノコロノ自在ナル詞ヅカヒ也何ノ子細アラン

(5) 難也

(6) 夫ニテモヒヌノ難ハ免カレズ

(7) 是ニヨラズ一向ニ通用スル詞ト云モノハナキ也ホドハホドバカリハバカリ言霊アルコトゾ

補注

(2) 暖風に霜ノキエルモノ也―暖風ニハ霜ノキユルモノ也(田)。

(4) 田中本にナシ。

【頭書1】ばかりとほど、一向に通用いかでいやしき事あらんとや正明は文銭とびた銭とのけぢめ二うとかりけん酒だにかはるればよしと心得たンめり

【頭書2】今按ニ霜モマダヒヌトハ冬ガレノ芦ナドニオケル霜モ其マ、ゲニ見ユル風情ヲツヨク云タルニテ形容ニ同ジ芦ノ葉近クヨリテ見ツケテ霜モカワカズト断レルニハアラズ是ヲ実景ニコマカニ解カントテ理ヲ以テ押サレタルニヨリテ本体ニタガヒタルナリ尾張イサ、カバカリ解ヒロゲタルヤウナレ共尚芦ノ葉ノ霜ヲ目ノ前ニ置テ解ケルニヨリテ畢竟ハ美濃ノ説ト同ジコトニテ只イサ、カナルコトヲ論ジタルノミナリ両説トモニアタラズ古抄ニ冬ガレタル芦ノ葉モサナガラニテイツモエ出ベキヤウニモ見エヌヲト解ルゾヨロシキ冬ノマ、ナル芦ノハニト云意ナリ 下ノ句ホドノハ間ノ

也 ホドハ雲井 タエテホドフルナド多クヨメルニ同ジクコ、ハ暖氣ガ芦

ヲ角グマスル時候ヲサシテホド、イヘル也ソノ暖氣風ノ俄ニ春メキタル時節ヲヨロコビテアタ、カナル風ガ吹ヨトヨメルガ春望ナリ ホドノトヨメルガ一首ノ眼目ナルヲ諸注ミナ心得カネテ解オホセズ 「カクバカリト云バカリハ是ホドノト云ニカヨヘリ待ホド遠シナド云時ハバカリニハカヨハズソレド、ノ言霊アルコト思フベシ恋ノ部ニホド バカリトツバケテヨメル有其所ニ云ベシ

ミヤコベノ便也ケリ白川ノ関ユクホドノ秋ノ初風 真淵

此ホド也バカリニハアラズ

【貼紙1】村雨の露もまだひぬ槇の葉に――

是モ木ノ下ニ立ヨリテ露ヲコマカニ見テヒヌト断レルニハアラズ 実景ナガラ形容ノゴトシ

補注

【頭書1】〇一向に通用―一向に通用す(田)。〇心得たンめり―心得ためり(田)。

【頭書2】〇カワカズト―カワカヌト(田)。〇イサ、カバカリ―イサ、カ(田)。〇芦ノハニト云意ナリ―芦ノ葉ニトノ意ナリ(田)。〇下ノ句ホドノハ間ノ也―下ノ句ホドノハ間也(田)。〇暖氣風ノ―暖風ノ(田)。〇是ホドノト云ニ―是ホドノト云ホドニ(田)。〇言霊アルコト―言霊アルコトヲ(田)。〇ミヤコベノ便也ケリ白川ノ関ユクホドノ秋ノ初風 真淵 田中本では「真淵翁ノ歌ニミヤコベノ便也ケリ白川ノ関ユクホドノ秋ノ初風」。

【貼紙1】村雨の露もまだひぬ槇の葉に―村雨ノ露モマダヒヌ云々(田)。

藤原秀能

26 夕月夜しほみちくらし難波江の芦のわか葉をこゆるしら波 (一四)

① 夕月夜は、塩みちくらしに時よせあり。【夕月夜は、芦のわか葉を浪のこゆるがみゆる料也。潮時の事也とおもひよらずや。】⁽²⁾又眺望にもかゝれり。③ 若葉にてまだ短き故に波のこゆる也。【此歌、夕月夜にさしくる潮

の、芦のわか葉こゆるさま、景気限なし。時よせありなどみるは、細なる過たり。(4)

(1) 増抄ノ説也

(2) 余韻ナレバクルシカラズ

(3) 是モ増抄也

(4) コマカナル処マデ調ヒタルカト、ノヒノヨロシキ也

【頭書1】春ノヨセハワカト云ルニ字バカリナレ共一首ノウヘニテ春望ト聞ユルナリ

【頭書2】時よせありと見たればとて一首の疵になるにもあらず カクノ如シ

補注

(4) ヨロシキ也―ヨロシキ歌ト云モノ也(田)。

【頭書2】カクノ如シ―田中本にナシ。

春のうた 西行

27ふりつみし高嶺の深雪とけにけり(1) 清瀧川の水のしらなみ(一五)

雪に消るといふと解るといふとのけぢめ此歌にて弁ふべし。【五ノ句雪げの水なれば消ともいふべきか。詩にも有。調によるべし。】此けりはおしはかりて定たる意也。【清瀧川の水のわかかへるを見て、愛宕などの高ねの雪のとけし事をしれる也。】水の白波、水の増りて浪の高き方によめる也。

(1) キヨクタギリ行意コモレリ

【頭書1】カ、ル名哥ヲモ一生涯ニ一首ハヨミ出タキ物ナリト心ガクベキコト也 堀河百首 カマクラヤミコシガ嵩ニ雪消テミナセノ川ニ水マサルナリ 是ハキエテト云リ

【頭書2】長秋詠藻 岩バシル水ノ白玉類見エテ清瀧川ニスメル月カナ月清 氷キシ水ノ白波岩コエテ清瀧川ニ春風ゾフクナド多クヨメレドコマカニテ皆オトレリ

是ラノ歌モナミ／＼ニハアラネドオトレリサマ／＼ニヨミテ見タルモノ也

【貼紙1】水の白浪此集の頃人の好みてよむ詞なりよき詞なり此歌にては水のまさりて波の高きさまによめるなり水の濁れることにいへる説はひがことなり

補注

【頭書1】田中本では「心ガクベキコト也」の後に「フル雪ハカツヅケヌラシ足引ノ山ノタキツセ音マサルナリ」の歌を挙げる。

【頭書2】○類見エテ―数見エテ(田)。

【貼紙1】○説はひがことなり―説はひがこと(田)。

百首の歌奉りける時

惟明親王

31うぐひすの涙のつらゝ打とけてふるすながらや春をしる覧(一六)

つらゝとは、所ひろくこほりたるをいふ。(1) 池のつらゝなど也。此子細随筆だつ物にいふべし。(2) 鶯のなく涙、いかに多くとも、(3) 池川のごとくたまりてつらゝとならん事いかゞ、(4) もし氷柱をつらゝとよませ玉しにはあらじか、俗語には諸国たるひをつらゝといふ。(5) 此集の頃より、しかいひしにはあらじか。一首の意は、うぐひすがなくなみだが、(6) つらゝとなりて、惣身についてある、それが「そろ／＼と解て来るので、ふるすにゐながら、春といふことをするでがなあらうと也。

(1) イカホドコマカニテモ云也

(2) 愛二用ナシ

(3) ツラ、ヲ躰ニ見ルニヨリテカゝル不当ノ論出タル也

(4) 形容ナレバ何ニテモヨシ

(5) イツヨリ云テモヨシ

(6) 誤解ナリ

【頭書1】本歌コホレル泪今ヤトクラン

【頭書2】前の霜もまたひぬを窮屈に見るべからずといへるにこれはなかく窮屈なるや惣身についてあるつらゝがそろ／＼とけてくるなど鶯に似つかはしからぬ解言にていといやし理屈をすてゝ正明が常談なる高調幽韻

を味ひてなだらかに見ば事もなき哥なるをや

【貼紙1】古今 雪の中に春は来にけり鶯の氷れる泪今やとくらんトイフ
哥ヲ心ニモチテヨメルナリ ふるすながらハ本哥の雪の中トイフニアタレ
リ上句下句トモニ詞ヲカヘテトレルナリ うちとけてはタゞ解ケテト云ベ
キヲ和ラグ意ニテ打解ケテトイヒタルカ

補注

- (1) コマカニテモ—コマキニテモ (田)。
- (3) 出タル也—出来ル也 (田)。
- (4) 田中本にナシ。
- (6) 誤解ナリ—誤解 (田)。

【頭書1】○本歌コホレル泪今ヤト克蘭—古今 雪ノ中ニ春ハ来ニケリ
鶯ノ氷レル泪今ヤト克蘭 (田)。○つらゝがそろ／＼つらゝがそろ／＼
と (田)。

前大僧正慈円

33天の原ふじの煙の春の色の霞になびく明ぼのゝそら (二七)

上の句、のもし五ッ重なりたる中に、けぶりののは、俗言にけぶりがといふ意
にて、余のゝとは異なり。四の句は、天の原は、おしなべて春の色にかす
める故に、煙もその霞へ立のぼるをいひて、【誤解也。四の句は、(1) 霞とな
りてなびく也。かすみの上へ煙が立そふ義にはあらず。】家隆朝臣の波には
なるゝ横雲と同じさま也 (2)。**【家隆卿の哥も誤解なり。此哥も誤解也 (3)。**
共に無理なる哥に非ず。一首の意は、虚空の高い所で、ふじの山の煙が、
霞 (4) となりてなびく、さて／＼春のあけぼのはおもしろき物ぞとなり。】
なびくとは、(5) たゞ立のぼりてなびくさまをいへるのみにて、なびくに意
はなし。【霞 (6) となりてなびくなれば、此詞至要也。かろくみてはあしか
めるを、先生は誤解して、かくいはるゝなり。(7) 明ぼのよせなし。曙な
らずとも同じことなるべければ也。但し此集の比は、春の歌には、かくい
つにてもあるべきことを明ぼのとよめる。例のことなり。今は心すべきわ

ざぞ。【○世上にもかうやうの論をする歌人ありて、結句には、たゞ紅葉と
いふ題に山をよまず、山紅葉といふ題あれば也、とやうにむつかしき事を
いふは、いと心せばくうたてき事也。此論も其うつりにて、猶うるさし。
すべて明ぼのにもたぐれにもわたるけしきを、明ぼのゝ空とか、たぐれの
空とか、便に随ひてよめる事は、その景をみし時分なれば、しかいでは
えあらぬわざ也。且此ふじの煙の霞 (8) となりて大空にたなびく時刻を、い
つばかりととはゞ、午とも未ともいはじ、猶あけぼのゝ空にぞありける。】
空も上に天原とあれば、よくもあらず。【曙の空といへるは、明ぼのゝ比と
いふ義にて、蒼天をさしていへるにはあらず。瑕瑾とはいかでかいはん。
すべて此註、こまかなるに過て、豪壮の氣少し。(9) 】【

(1) 霞ニトヨメルヲ霞ト、イヘルハ誤解也増抄ノ説也

(2) ハナルゝトナビクトノタガヒ有

(3) 正明モ両首トモニ誤解セリ

(4) (6) 「となりて」の左に「○」を付し、右に「ニシタガヒ」と傍注。

(8) は同様にして「シタガヒテ」と傍注。

(5) 下地アル霞ニ随ヒナビキテ煙モ春色ヲソフル風情ナレバナビクニ意
ヲコメタルナリ

(7) 正明モ誤解シテカク云也

(9) ヨク云タリ

【頭書1】古抄曰二ノ句ニテ切テ見ル也富士ノ煙ノ高天ニサシノボリタル
モハヤ春ニ同ジ心シテ春ノ色ニナリケリトアリ

【頭書2】霞ニナビクトハ煙ガ霞ニケオサレテ随ヒ行義ナリ人ニ心ガナビ
クト云ト同ジコト也大空ニテ富士ノ煙ガ春ノ色ノ霞ニ随ヒナビキテ同ジ春
色トナリ行曙ノ景色ガ面白シト也

【頭書3】○世上ニモ云々 正明ガ見説コ、ニ有オロソカニ見ルベカラズ
此意ヲ諸歌人年久ク得サトラザリシニヨリテヨキ哥ヨムコトアタハザリシ
ナリ鈴屋翁ハヤク此意ヲサトリテ人ニ教ヘラレザリシハアカヌコトニナン
穴カシコ

補注

【頭書1】春ノ色ニ―春色ニ（田）。

【頭書2】心ガナビクト―心ノナビクト（田）。

【頭書3】鈴屋翁―鈴翁（田）。

晚霞 後徳大寺左大臣

35 (1) なごの海の霞のまよりながむれば入日をあらふおきつ白波（一八）

初句のもじ、(2) やとあるべき歌なり。【(3) これはいはれたり。】此ながめは霞のまならでも同じ事なれば、題の意はたらかず(4)。【かすみの間よりながめたる入日の、いつよりもをかしかりし也。かばかりめでたき景気なるを、いとをしうも難ぜらるゝものかな。志賀の浜松のやうにもよむ世中に、かばかりの事にいかでか拘らむ。すべて題意はたらかずなどいふ事は、多くは持法にくみ立る後世の哥の事也。】(5)

(1) 摂津

(2) ヤト云テハヨリト云ニ打合ワロシ

(3) シカラズ

(4) 新説ワロシ

(5) 是ハヨロシ

【頭書1】海上ニ棚引タル霞ノ間ヨリ遠ク見ヤリタルサマナレバナゴノ海ノ霞ノ間トハヨメルナリヤニテハイサハカワロシ入日ヲアラフヤウニ見ユルハハルカ遠キ西ノ方ノ海上ナルベシヨリト云詞ニ心ヲツクベシ

【頭書2】フシミ山松ノカゲヨリトヨメルニ似タリ

【頭書3】新千五 前大納言公護 藤代ノ御坂ノ松ノ木ノ間ヨリ夕日ニ見ユルアハチ島山此初五ノのモジト同ジ

補注

【頭書3】初五ノ―初句ノ（田）。

をのこども詩をつくりて歌にあはせ侍しに水郷春望

太上天皇御製

36 みわたせば山もとかすむ水無瀬川夕は秋と何おもひけむ（一九）

此集秋、清輔朝臣の、うす霧のまがきの花の朝じめり秋は夕と誰かいひけむとある哥よりは、上ノ御句もまさり【薄ぎりのまがきの花の朝じめり、此御歌におとるけぢめふとしもみえわかず。】又秋は夕といふは常の事なるに、

(1) ゆふべは秋(2) とあるはこよなくめづらかなり。【これはいはれたり(3)。

さて此御歌の上の句も、夕よせなし、みなせ川のかすむは明ぼのにもあるけしきなればありなどいはるべきに、帝の御歌は、議論をさしおかれたる例にて、音もなきにやあらん(4)。かくのごとき御歌は、風韻のかけ合にて、上句何となくゆふべのけしきとみゆるやうによみなさせ玉へるなり。(5)もしほのくくと松原かすむ三笠山といはゞ、それとても朝夕にわたれども、猶明ぼのくけしき也。気韻はかたちなき物なれども、求むべき跡なきにしもあらず(6)。御一首の意は、みなせ川をみわたせば、山もとのかすむ春の夕ぐれもあはれるもの也、夕ぐれのあはれは秋に限りたるものぞと何におもひし事やらんと也。(7)

(1) タヲ体ニイヒタル也

(2) 是モ常ノコト也

(3) 心得ず

(4) 前ニモカクイヘリ

(5) 穿タル云ザマ也

(6) 是ハ聞エタリ

(7) 帝ノ御歌ヲ小楯ニ取テ鈴翁ヲ難ジタルハイトモくニクムベキコト也

【頭書1】秋ハタトヨメルハ秋ヲ体ニヨメル哥ナリ此御。夕ハ秋ト、ヨマセ玉ヘルハタヲ体ニテヨミ玉ヘルニテ彼ハカレ是ハコレニテ必シカラザレバ聞エヌヲ互ニ通ハセテモイハルハヲメヅラカニ上下ニカヘテヨマセ玉ヘルヤウニ解カレタル意ヲ得ガタシ正明モ是ヲウベナヒタルコトイカナルコトカ秋ハタハハモジニテ体用ヲ可考 イヅレモ常ノコト也サテソノ詞ニ付テ歌ノ勝劣ヲ云ハレタルモ不審ナルコト也

【頭書2】君子は人の美をなすとは唐国にさへいへることなるを人のいひ
出ぬ事まで穴ぐり出て私意を立たるいにくむべし是口棹の感情近世の学
者此癖多し

補注

【頭書1】○秋ハタ、トヨメルハ―秋ハタト、ヨメルハ(田)。○此御。タ
ハ秋ト、ヨマセ玉ヘルハ―此タハ秋ト、ヨマセ玉ヘルハ(田)。○タヲ体ニ
テヨミ玉ヘル―タヲ体ニノ玉ヘル(田)。○秋ハタハ、ハモジニテ―秋ハタ
ハノハモジニテ(田)。

【頭書2】○是口棹の感情―是口棹の感情(田)。○此癖多し―此癖多し(田)。

摂政家百首歌合ニ春曙

家隆朝臣

37 霞たつ末の松山ほのぐと波にはなるゝ横雲の空(二〇)

末の松山を浪のこゆるものにして、かくよめる也(1)。かやうの趣は(2)、
此集のころのたくみの(3)過たる也。【君をゝきてあだし心をわがもたば末
の松山なみもこえなんとある本歌は、いかにも浪のこえざるために(4)し
たるなれば、波のこゆる物にしてとあるは、しひたる説にちかし(5)。】霞
たつとほのぐとかけあへり。【此三の句は、末の松山は、霞にほのぐと
くらく、波にはなるゝ横雲はほのぐとあくるにて、両方へわたれり。】一

首の意、横雲はなべては峰に於て(6)はなるゝ物なるに、是は波の上に於て

(7)はなるゝにて、【一首の意は、末の松山は霞にをぐらき明がたに、沖の
方はよこ雲のなみに※わかると也。海山を一目見渡したるさまにて、いと
近きけぶり、むつかしくみるべからず。】上の慈円大僧正の霞になびくとお
なじさま也(8)。【これも誤解也。】歌ざまはいとめでたけれど、浪に(9)
(9)はなるゝは心ゆかず。【山水のけしきめにうかび来るやうにて、いと心ゆ
きめでたきを、情なうもいはるゝ物かな。(11)】

(1) 是也

(2) 松山ト契リシ人ハツレナクテ袖コス波ニ残ル月カゲ

(3) 過タルトハワロシト思ハレタルモノカ

(4) 此一首バカリ也

(5) シカラズ悉波ノコユル物ニシテヨメリ作例ヲミルベシ

(6) 雲ハワカル、トコソイヘ

(7) 雲ノハナル、ト云コトハキカズ

(8) 霞ニナビクハ霞ニ随ヒ行也波ニハナル、ハ波ト雲ガ離別スル也

(9) 誤解ニハアラジ風体ガ同トナルベシ

(10) ハナル、ガ眼目也

(11) ヨロシ

補注

(1) (3) (4) (5) (7) 田中本にナシ。

(2) 田中本では【頭書1】の中でこの歌を引く。

(8) 波ト雲ガ―波ト雲トガ(田)。

(9) 風体―風体(田)。

※「わかると也」に傍注「ハナル、トコソヨメレ」。

【頭書1】波モコエナンノ歌ハイカニモ波ノコエヌ例ニ引タルナレ共ソレ
ヨリノ本歌ドリハ皆波ノコユルモノニシテヨメリハ末ノ松山波コサジトハ。
ナドヲハジメ故郷ニマツラン人モ末ノマツ老ノ波コエケル身コソ哀ナレ
月清 引カヘテアダシ心ノ末ノ松マツ夜ノ果ハ浪ノコエヌル
長秋 ウカリケリ昔ノ末ノ松山ニ浪コセトヤハ思ヒ置ケン。ナドイト多シ
皆浪ノコユルモノニシテヨメリ此哥モ其心ニテ末ノ松山ニハ波コユルヲヨ
セニヨムコト也

【頭書2】増抄日霞立末ト云カケテ遠望ノ体ヲモタセタルナリト云リ

古抄日曙ニ横雲ノ明ユクマ、ニ波ニ立離レタルサマ海山カケテ風情タグヒ
ナクヤト有リ

古抄トモヨロシ一首ノ意ハホノグラキ春ノ曙ニ霞ノ立テアル末ヲ見レバ末

ノ松山ガ波ト山ト次第ノ二別レノ二ハナレ行風景ガドウモイヘヌ面白
イコトカナト也

〔貼紙1〕初句霞立トアルマデニハ四句春ノ詞ナケレ共春ノ曙ノ意ハ慥也
末ノ松山ヲ浪ノコユル物ニシテヨメル也トハイカバ旧説ノ如ク山ゴシニ海
ノ見ユル意ニヨミナシタルナルベシ実ニサル所ハ海辺ニアマタ有ル也波ニ
ハナルト云メデタシ 久老云

〔貼紙2〕或抄に末松山は山ゴしに海のみゆる所なりといひて解たるは四
ノ句を心得かねてのしし事なり

〔挟込1〕伴雄云

美濃いとおろそかにて聞とり難し尾張末の松山は霞にをぐらき明がたにみ
ていと受られず霞はくらしといへばくらき様なれど尚明行方に縁ある物を
や松のかたはくらく沖の方は明ゆくなどいひては松山の浪路も別所の様に
聞えてほのくの趣意いとせんしよりて両家苞の翁尚信がたし久秋が説
一わたりいはれたり山ゴしの上に海の見ゆるとはいとをかしう解えられた
りと覚ゆれど猶考ふるに松原などの上をこして向に海の見ゆるなどは随分
あるさまにて既に梢にかゝる海士の釣船などよみなしたれど山ゴしに海の
みゆるはあまり大そうにや一ツの山に登りて今一ツかなたの山より向に海
の見ゆるなどは所によりては有事もあれど打まかせてはさはいひがたくや
あらん末の松山さかり小き山とも聞えずよしや小くとも此歌松山に登りて
よめるならねばいよ／＼さはいひがたからん伴雄考ふるに初二句霞たつ末
とつゞけたるに苞首の意霞立末の方の松山を見渡せばほの／＼と横雲が浪
に分れて雲と浪との差別見え行と也春曙の実景色目にうかぶやうにいて
めでたし末の松山を主として見るべからず末の松山は霞のたつすゑとつけ
たるのみにて海辺にあるなれば何となく似つかはしきなり

補注

【頭書1】○浪ノコユル―浪ゾ越ヌル(田)。○浪コセトヤハ―浪コセバ
ヤト(田)。○ナドイト多シ―イト多シ(田)。此哥モ其心ニテ―此歌モソ
ノ心バヘニテ(田)。

【頭書2】松山ガ波ト山ト―松山ガ波ト山(田)。

〔貼紙1〕○四句春の詞ナケレ共―下四句春の詞ナケレ共(田)。○ヨメル
也トハ―ヨメルトハ(田)。○久老云―田中本にナシ。

〔貼紙2〕田中本にナシ。

〔挟込1〕○両家苞の―両の家苞の(田)。○さかり小き山とも―さばかり
ちいさき山とも(田)。○春曙の実景色―春曙の実色(田)。○末の松山は
霞のたつすゑと―末の松山は霞たつ末と(田)。○海辺にあるなれば―さて
海辺にあるなれば(田)。

守覚法親王家五十首歌ニ【家といふもじ発本に无。さる本もありしに
や。御出家の御事なれば家とは申ざるか。】 藤原定家朝臣

38 ① 春の夜の夢のうき橋とだえして峰にわかるゝ横雲の空(二一)

とだえをいはんために、夢を夢のうき橋とよみ玉へり。夢のとだえと、横
雲のわかるゝとをたゝかはせたり。【すべて聞しといへばあくるといふやう
の反対を、たゝかはせたりといはるゝ例なるに、これはいかさまにたゝか
ふにかあらん。②】三句の下にみればといふ言をそへ、嶺の下にもゝじを
添て心得べし③。【嶺にもわかるゝといふ意にはあらず。たゞおいらかに
みてあるべきなり。猶いはゞ、峰にもわかるゝといひて、夢もとだゆると
ひゞかせたる、哥ならば、もゝじこそ大切なるべけれ、これを除きて聞え
む物かは。④】⑤又橋は峰に縁あれば、【峰のかけはしとはいへれど、棧は
打まかせたる橋にあらず。これをおきては葛城の久米の岩橋、又神仙にわ
たりたる事也。川入江などにいふ如く、橋は嶺の縁の詞とはいかでかい
ん。浮はしとあればさらなり。⑥】四句までを浮橋へつけて、横雲のわか
るゝをもすなはち夢のさむるにしたるにもあらんか。【此説いとむつかしく
きこえがたし。一首の意は、上の句は、春の夜の眠のさむる意、下の句は、
夜のある意なるを⑦、ねざむる事を夢のうきはしとだえしてといひ、夜
のある事を嶺にわかるゝ横雲の空といふ言の文章にいとめでたし。只
何となき趣も、ことばのつゞけざまによりてあはれにもをかしうもきこゆ
る事ぞかし⑧。すべて哥の意は、洒落にとゞこほらぬやうにとくべき事也。

しかむつかしく説ては、雄壯の氣うせて、しほ／＼くた／＼となる、あた
ら事也。わが哥も、たゞすら／＼とどこほらぬやうによむなんよろしき。
さばかりむつかしき事をおもひてよみ出んには、おのれのみ心えて、人は
えさとらじ物をや。【歌さまのめでたきにあはせては、春の夜の詮なし⁽⁹⁾。

夢のとだえに夜のみじかき事を思はせたるべけれど、春の夜のみじかき
は、中々夢に残るべきものをや⁽¹⁰⁾。【春の夜の詮は夜のみじかき也。と
だえしてとは夢の中絶する意なり。見おはりて後夜のある事にはあらず。
されば夜のみじかき主意はあらは也。春の夜のみじかきには中々夢は残る
べき物をやとあるは一むき也。夢をみはてゞ夜の明し後までも残るやうに
よむも一ツの趣、ねざむべきほどにねざめて夢の中絶するやうによむも一
ツの趣なり。いづれを常の事とかさだめむ。⁽¹¹⁾】

(1) 古抄曰徹書記物語曰夢ウチサメテ見タレバ峯ニ横雲ノ別ル、比ナリ
此体ヲソノマ、ヨク云出タルナド云ヘリサテモアルベシ

(2) 増抄ニ取合セタリトアルガヨシ

(3) 此説古抄也ヨロシ

(4) 聞ユル也夫ガ余韻ニアラズヤ

(5) 以下ミノ、ノ説ワロシ

(6) ヨク難ジタリ

(7) 古抄也

(8) 古抄

(9) ヨロシキ説也

(10) 以上ヨシナキ新説也

(11) 是モヨロシ

【頭書1】増抄曰上手ノシワザナレバヤス／＼トシタルコトヲモ故アルヤ
ウニ云ナシタルトイヘリ

【頭書2】一首の解美濃の説はいとくだ／＼しくて詞とりがたし又尾張の
説も上の句はねざむる事下の句は夜の明る事とばかりにては此卿の奇巧の
趣意あらはれがたしこれは嶺に棚引横雲はげに橋わたせるやうに見ゆるも
のなるにその雲の明行ま／＼に絶々に別れ行は橋のとだゆる如く見ゆる物也

是目前有形の景色也さるを無形の夢の覚しことを有形の景色もていひくだ
して寓意するところ有形の景に帰したる自他虚実の相応難^レ状の景を写し
たるものにて奇巧変化限りなしといふべし

【頭書3】古抄上ノ句は夢ノサメタルコト春ノ夜ノハカナク明行時分夢モ
跡ナクテサテモ名ゴリヲシキ物カナト詠ヤルニ横雲ノ何心ナク別レ行ヨト
云心ヲコメテ横雲ノ空ト云捨タル哥也トアリ是ニテヨク聞エタルモノヲ注
解ノ長ク小ムツカシキガイトウルサシ

補注

(1) 田中本では頭書に注記あり。○云出タルナド云ヘリ―云出タル也ト
云ヘリ(田)。○サテモアルベシ―サモアルベシ(田)。

(4) 余韻ニアラズヤ―余韻ニハアラズヤ(田)。

【頭書1】云ナシタルトイヘリ―云ナシタル也トイヘリ(田)。

【頭書2】○詞とりがたし―聞取がたし(田)。○とだゆる―とだえたる(田)。

40 大ぞらは梅のにほひにかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月(二二)

二三の句は、霞める空に梅が香のみちたるをかくいひなせる也。【此説の如
し。猶こまやかに一首の意をとくべし。此歌は春の月はまことには霞にて
かすめるを、梅が香の空にみちたれば、其梅が香にてかすむやうにいひな
したる也。大空は梅のにほひにてかすみながら、雲霧とはやうかはりて、
さすがに花の香の事なれば、くもりもはてぬと也。⁽¹⁾四の句はたゞ古歌
の趣をとりて、【古哥の趣をとりたるにはあらず。詞ばかりとれる也。これ
古歌をとる通途なり⁽²⁾。本哥、てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ
月夜にしくものぞなき】春の月のさま也。【此句は梅のにほひにかすみつゝ
にかけ合たり。たゞ春の月のさまのみにあらず⁽³⁾。詞のかけ合あり、⁽⁴⁾
意のかけ合あり。上に花の香といひて、下に梅がえなどいふばかりの事は
何事かあらん。】梅の句かけ合たる詞なき故ニはたらかず。⁽⁵⁾此句を除きて
たゞかすみつゝにてもきこゆれば也。【四の句を疎漏にみられたる故、かゝ
る説もいでくる也。又此句を除きててもきこゆれば也とあるもあぢきなし。

げになくてもきこえはすれど、あれば秀哥也。無用のもじを一もじもいれ
じと構ふるは、草庵などの風骨也。】或人の云、⁽⁶⁾ 大空はくもりもはてぬ⁽⁷⁾
花の香に梅さく山の月ぞかすめるなどあらまほしといへり。【此或人は物に
くるふか⁽⁸⁾。さばかり千古の秀逸を、あやしき哥により直したるよ。いと
かしこきわざ也。直したる哥はいふにもたらねど、筆のついでにすこしい
はゞ、もとの哥は梅のほひにてはかすまぬを、いひなしにて梅のほひ
にかすみつゝとたしかにことわりたる故、くもりもはてぬといふ事きこえ
たるを、なほしは大空はくもりもはてぬ花の香にとふと打出たり。しかふ
と打出ては花の匂ひにくもらぬは勿論ならずや。畢竟上ノ句無理也。上に花
の香といひ、下に梅咲などいひて上下かけ合たりとおもふめりな。或人の
まどひはいかゞはせん、先生のこゝにのせられたる意をしらず。⁽⁹⁾】

(1) 以上古抄也

(2) 何ヲ思ヒテカク窮屈ニイヘルニヤ

(3) オモシロシ

(4) 意ノカケ合尤大切ナリ

(5) 梅ノ句ト云詞ガ此哥ノ趣也一首ニミチテカケ合ヘリ

(6) 鈴屋風カケ合斗リニ流レテノロケタリ

(7) 万葉モ古今モ此集モ艸庵モ無用ノ文字ハ入レジト構ヘテヨミタルモ
ノナリ

(8) 哥ヲ見損ジタリトテ物ニクルヒタルニモアラジカクイハゞ正明コソ
狂人ノ第一ナルベケレ

(9) 先生モソレヨシトハ思ハレタルナレバ心ハ知ラレタリ

【頭書1】須弥一棒分碎

【頭書2】増抄曰ク本歌ハ朧月夜ニシク物モナシト云ヘルヲ是ニ一重アゲ
テ梅ノ句ヲソヘタリ本歌ヲ土台トシテ今一重ツノリタル作也此卿ノ御歌ニ
カハル取ヤウ多シト云ヘリ

【頭書3】美濃ワロシ

【頭書4】尾張スベテヨロシ

補注

(9) ソレヨシトハ―ソレヨシト(田)。

百首歌奉りし時

44、梅の花にほひをうつす袖のうへに軒もる月のかげぞあらそふ(二三)

【一首の意は、梅のはなのほひを袖の上にうつせば、軒もる月のかげは、
我もうつらんと来りあらそふと也。⁽¹⁾ 月の袖にうつるは月花のあはれにお
ちし涙也。此歌しらべをかしきを、みのゝ家づともれたる故を知らず。

⁽²⁾】

(1) 古抄ノ説也

(2) 是モ帝ノ御歌ナラバ鈴屋翁ヲ難ズルヤウモアルベキヲ

【頭書1】増抄ニ曰アラソフトハ勝劣ノナキ意ナリトアリ

補注

(2) 鈴屋翁―鈴翁(田)。

家隆朝臣

45 梅が香にむかしをとへば春の月こたへぬかげぞ袖にうつれる(二四)

⁽¹⁾ 伊勢物語業平朝臣の、月やあらぬ云々の歌の段をもて、かの朝臣の心に
てよめる哥なり。⁽²⁾ 【さやうにむつかしき哥のとりざまある事なし⁽³⁾。たゞ
大かたの懐古のうた⁽⁴⁾とおもふべし。】影ぞのぞもじ力あり。すべてかやう
のぞには心をつけて見べき也。月影の袖に移るといふに、いよ／＼昔をこ
ひて泪のかゝる意をこめたり。月のこたへぬと云て、梅香のこたへぬ事も
聞えたるは、及びがたきいひざま也。【以上此説のごとし。】一首の意は、
恋しきむかしの事を、かはらぬ梅が香にとへば、梅が香はこたへずして、
月ぞこたへがほなるを、それもこたへはせずして、其影の袖にうつるよと
也。【此説のごとし。業平朝臣の心にてよめるなどやうの⁽⁴⁾ むつかしき事
をさし置て、故郷などにて、何となくむかしを恋る意にみればたがふ事な
し。】

(1) 古抄ノ説

(2) 是也

(3) 六ケシキコトハナシ在五ノ心ヲコメテ見レバイヨ／＼秀歌ナルコト
正明ガ前ニナクテモ聞エハスレドアレバ秀歌也トイヘルニ同ジ

(4) 在五ノ条ニイト／＼ムツカシク入クミタルコトノヤウ覺エタルハイ
カナルコトカサノミ解ガタキコトニモナキヤ

【頭書1】懷古の本歌によりて惜古の意をいへれば自ら其情通ふべしされ
ど在五の心にてよめるといへるは誤解なり

【頭書2】月ノ前ノ梅ガ香ニ春ヲト云ニ在五ノ意オノヅカラ見ユルガ名人
ノ粉骨ナリ

補注

(4) ○在五ノ条ニ―在五ノ条(田)。○コトノヤウーコトノ様ニ(田)。
※田中本では、「懷古のうた」に傍注「是ニテモ聞エテヨシ」。

【頭書2】○春ヲト云ニ―昔ヲト云ニ(田)。○オノヅカラ見ユルガ―オノ
ヅカラホノカニ見ユルガ(田)。

千五百番哥合に

右衛門督通具

46 梅花たが袖ふれし匂ひぞと春やむかしの月にとはゞや(二五)

二の句ふるき哥のことばなり。【古今集、色よりも香こそあはれとおもほゆ
れたが袖ふれし宿の梅ぞもとある哥の詞也。二の句も四の句もおなじく古
哥の詞なるを、こゝはかくあらくとかるゝは、此句をおもくみては、伊勢
物語の業平の事とゝくに(1) 妨げになれば也。春やむかしの月とは、むかし
のまゝの月といふ事。のもじ古哥を受たる詞にて、春やむかしのといひし、
其月に問ばやと也。古哥をとる法は(1)、花やかにめだゝしき詞を切出て、
活用する也。古来(3) みなしかり。】此集のころ、かの業平朝臣の歌をとり
て、春やむかしのといふ事をよめる哥多し。そはなべての本哥とれるやう

とはかりて、此一句にかの哥の一首の意をこめ、或は彼段の意をもこめ
てとれり。【月やあらぬの哥をとるやうとて、別にあるべきにあらず。此句
は古哥をうけたれど、なべての懷古に取なしたる也。これ活用也。】此歌に
ては、此四ノ句に彼の上ノ句の意をこめて、【のもじは、春や昔のとよみし、
(4) 其月にとはゞやと云義。昔たが袖をふれてかやうになつかしき香に匂ふ
ぞと、むかしの月ニ問ばやと也。】月はむかしの春のまゝの月なれば、昔の
事をもよくしりたるべければ、昔たが袖をふれし名残の匂ひぞと問むと也
(5)。【以上此説のごとし。何となき懷古のうた也。業平朝臣の、去年の春
をこひしといふ事を忘るれば、たがふ所なし。(6)】

(1) 何ノ妨ニカナラン

(2) 古歌ヲトル法ト云モノハナシイカヤウニモトル也

(3) ミナハシカラズマレニハアルナリ

(4) 是ガ本歌ドリ也

(5) 以上古抄増抄ニ同ジ

(6) 在五ノ心ヲコメテ見ルハ正明ガ常談余韻ニコメタルニテ面白キナリ
【頭書1】少シマガラハシケレ共月ヤアラヌノ哥ヲ取ヤウガ別ニアリトニ
ハアラズ本哥ノ一句ヲ取テノト受テイヒ含ムル格ノコトヲ云ハレタル也サ
ルハ此哥ニ本歌取多ケレバ也其意ハ正明モヨク知タリケンヲ文意ノマガラ
ハシキヲ付入テトガメタルハイト悪シキ心アリシヲノコ也

補注

【頭書1】サルハ―サレバ(田)。

皇太后宮大夫俊成女

47 梅花あかぬ色香もむかしにておなじ形見の春の夜の月(二六)

梅花あかぬ色香とゞきたるは、折てなりけりの歌の詞なり。【古今集、よ
そにのみあはれとぞみし梅花あかぬ色香は折て也けり。】本歌といふにはあ
らず。【これ古歌の詞にて、いはゆる本歌なり。しかるを(1) かくよそげに
いはるゝは、五条の西対の事とする妨なる故にて、上の歌のたが袖ふれし

と同じこと也。弁説も又同事にて、何となき懷古の哥、伊勢物語の義にあらず。【すべて昔にてといふに二ッ有。昔になりて今は跡もなき意と、又むかしのまゝにてかはらぬ意となり。こゝなるは後の意なり。】以上みなよろし。【此歌もかの伊勢物語の意なり⁽²⁾。】【此歌をかの段の意とは、何を拠としていはるゝにか⁽³⁾。月といひ、春の夜といひ、梅といひ、昔といふもじ、一ッ二ッ⁽⁴⁾合期すれば、伊勢物語といはるれど、これらはみな常よむ事にて、主ある詞にはあらぬをや。】あかぬとは梅のうへにいへれども、昔へもひゞかせたるものにて、あかぬむかしの意なり。【あかぬは現在むかしは過去なれば、あかぬ昔といふ詞あるべきにあらず。一首のさまも、しかひゞきてもきこえず。⁽⁵⁾】一首の意は、【我先いふべし。】此故郷は、里はいく世かあればたれども⁽⁶⁾、梅の花のあかぬ色香もむかしのまゝにて、春夜の月とおなじく、その世のかたみぞとなり。⁽⁷⁾【此見る春の月は、あかぬむかしの形見なるを、月のみならず、梅花の色香もむかしのまゝにて、おなじかたみなるぞと也。】梅の花とおなじく、月もむかしのかたみぞといふづきなるを、なかへさまにはとかれけむ。⁽⁸⁾】

(1) アラヌ色香ノ詞ノ出所ヲイハレタルニヨソゲトハイカニ

(2) 是ナリ

(3) 正明ハ何ヲ拠トシテサニハアラズト云ニカ

(4) 「月といひ、春の夜といひ、梅といひ、昔といふもじ」の「月」「春」

「夜」「梅」「昔」の各文字の左に朱で「□」を付して傍注「三ツモ四ツモ五ツモ合期セリ」。

(5) 此説ヨクアタレリ

(6) 「此故郷」・「ども」にそれぞれ朱で「・」を付して傍注「以上歌ノ詞ニモ余韻ニモナキコト也」。

(7) 是ニテヨク聞エタリ サテ其上在五ノ意ヲコメテ見ルガ余韻ニテ金玉トナル也

(8) カヘザマニハ正明ガ考ヘタル也 色香モ昔ニテト云テ春ノ夜ノ月トトマリタレバ詮ナルハ月也 サレ共是ラハ前後表裏ノ論ハイラヌコト也 コマカナルコトヲキラヒカク差細ニイヘルハ例ニタガヘリ ウルサ

キコト也

【頭書1】五条ノ西ノ対ノコトトスルニ妨ニナルト云コト前ニモ見エタリ此意ヲ考ルニ本歌トハ思ハレナガラ妨トナルニヨリテコトヲマゲテカク云ハルゝ也ト云ル弁説ト聞エタリ 正明コソサル弁倭ヲ以テモ強テ人ヲ云オトシメント構フレ 鈴翁ニサルツタナキ心アルベキカハ

【頭書2】主アル詞ヲ取テヨムヲ本歌取ト心得タルハヲカシキ考ナリ

【頭書3】在五ヲ云ケサントテ故郷ノアレタルサマニトキマゲタルハ歌ヲ傍ニシタル私説也 此意バヘツギ／＼ニア 心シテ見ルベシ

【頭書4】以上三首同ジ在五ノ本歌取ナリ

補注

(1) ヨソゲトハヨソゲ也トハ(田)。

(8) ○タガヘタル也―タガヘタル(田)。○詮ナルハ月也―月ガ詮也(田)。

○キラヒカク―キラヒナガラカク(田)。

【頭書3】ツギ／＼ニア―ツギ／＼ニアリ(田)。

題しらず 西行

51とめこかし梅盛なるわが宿をうときも人はをりにこそよれ(二七)

上句二三―と句を次第して聞べし。【かく打かへしたるにて、語勢いとくめでたきなり。】四の句、人はといふ詞は、とめこかしの上につけて意得べし。【此所誤解也。たゞ詞つゞきのまゝにみるよろし。】下句此法師のふりなり。【此上人は堅固の道心にて、和哥のうへにも名利をおもはれず、多くは真率にて、下句今少おもはるべくやとみゆる⁽¹⁾、ありがたさにぞなみだこぼるゝなど様ニ、かろくいひ捨たるが多かり。もし此上人の体とはいはゞ、さる方をいふべき也。しかるにうときも人はをりにこそよれ、苔の下水道もとむらんなど、力いりて、此集の比の常調也。此上人のふりとは、いかにいはるゝにか。】一首の意【われまづいふべし。梅さかりなる我宿をとめ来れかし、人といふ物は、疎遠なるも折によりたる物ぞと也。人はといふ語勢をおもふべし。⁽²⁾】うとき間なりとてとはぬも、折からにこそよる事

なれ、此梅花のさかりなる我宿をば、うとき人なりとも【四の句をかくみては一首の本意なし。もといひはといへるてにをはを味ふべし。】香をとめてとひ来よかしと也。【人はといふもじの置所たがひたる説なり。】⁽³⁾

(1) サニモアラジ

(2) 説得タリ古抄ニヨレリ

(3) ヨロシ

【頭書1】句ヲ次第シテ聞クコト歌ニヨリテハヨク聞トラレテアシキニハアラネドモ 然一句ノニ割碎テ続ギ合セタル上ニテ趣意バカリ聞クコトヲノミ教ヘテハ一首ノ上ノ調鍊ヲ見ルコトウトクナリテイトヨロシカラズ但シ古今集ヲ解ニハ宜シ 此集ハ語勢ノ連続言外ノ余韻ニ殊ニ心ヲツケテ見ルベキナレバ此釈法大方ハ妨ニナレリ スベテ歌ハ一首ヲ一目ニ見ベキコト肝要ナリ

【頭書2】 苔ノ下水ノ歌モ此歌ニモ此上人ノ風ソナハレリ

【頭書3】 美濃四ノ句ノ注増抄ニヨラレタリワロシ

補注

【頭書2】 歌モ此歌ニモ―歌ニモ（田）。

百首歌奉りしに春の歌

式子内親王

52 ながめつるけふはむかしになりぬとも軒端の梅は我を忘るな（二八）

我なくなりて、昔の人になりぬとも、【けふは今日なり。むかしは昔年なり。昔の人といふ詞此歌にはなし。たゞし当今の往昔になるとは、人の死て、世の換りたる事なれば、おのづから其意はある也。】⁽¹⁾ けふかくながめつる事を忘るなとなり。【一首の意は、物おもひをして、軒端の梅をうつとりと見とれたる今日の事を、我は死、世もかはりて、昔といふやうになりても、梅は存在するであらうほどに、我を忘るゝなとよませ玉へり。】梅はといへるはもじ、心をつくべし。思ひ出る人はあるまじきを、せめて梅はと聞えてあはれ也。【はもじ此意なし。すべておもひ出る人はあるまじきをと

いふ意詞一首にみえず。はもじは上のはと相応して、人は死、今日は昔年

となりても、梅は存在すべきほどにといふはの字也。【真木柱巻に、今はとて宿かれぬ共なれきつる槇の柱は我をわするなとある哥より出たるべし。

(1) カク思ヒナガラ難シタルハ事ヲ好メルナリ

【頭書】 思ひ出る人はあるまじきをといふ詞一首にみえず詞に露頭せずしてしか思はるゝが余情也 しか見てぞ此歌いとゞあはれなる

土御門内大臣家にて梅香留袖

藤原有家朝臣

53 散ぬればにほひばかりをうめの花ありとや袖に春風の吹（二九）

二の句のをもじ、なる物をといふ意なり。散ぬればとは、手折て持たる梅

花のちりしをいふ。さやうにみたれば袖と云事よせなし。【立よる計にて

も、行かふ袖にても、袖だに句へばよろし。手折しならば先手折て袖の句

ふ也。今手折持たるには非ず。】⁽¹⁾ 手折持たりとは詞にみえねども、本歌にを

りつれば袖こそとあるにて、【折つれば袖こそ句へ梅花ありとやこゝに鶯の

なく。】おのづからさやうに聞ゆ。かゝる所此集の比の歌のたくみ也。本歌

のとりにざまおもしろし。【一首の意、梅の花が散たれば、句ひばかり袖に残

てゐる物を、まだ花が有とおもふかして、我袖に春かぜがふくと也。】

題しらず

八条院高倉

54、ひとりのみながめて散ぬ梅の花しるばかりなる人はとひこで（三〇）

【本歌、君ならで誰にかみせん梅の花いろをも香をもしる人ぞしる。一首の意は、たゞわれひとりながめて、あたら梅のはながちり果たる事よ、色をも香をもしるほどの人は、とひも来ずしてと也。本歌のとりにざま、色をも香をもといふ事を、本歌に譲りたる、上の通具卿の哥と同じ。】

【頭書1】 本歌詞バカリトル例ナラバ此歌ニ色ヲモ香ヲモト云詞ヲバ何ニヨリテ補タルコトゾ此注ハ正明流ニアラズ

百首歌奉し時

源具親

57 難波がたかすまぬ (1) 浪もかすみけりうつるもくもるおぼろ月夜に (三二)

とちめのは (2)、うつるもくもる臘月夜なる故に、かすまぬ浪 (3) も、おぼろ月夜に (4) かすみけりといふ意也。【一首の意は、難波潟でみれば、(5) なみの霞むといふ道理はなけれど、それさへかすんだ、それは水へ移た月かげも、空のくもりたるなりにうつる故にと也。此歌みのゝ家づとにいとめでたし、詞めでたし、二三の句と四の句とのかけ合、いとめでたしとあり。大かた新古今集の歌、いづれかめでたからざらん。いふもさらなる事なれば、みなさし置て論ぜざる事也 (6)。此歌も上にかすまぬ浪も霞けりと二句 (7) いひ、下はうつるもくもると一句にいへる、緩急の勢いとめでたし。されど結句にとゝまりたるは、強弩之末、不能穿魯縞、いきほひつきてくるしげ也。 (7) 此先生の、 (8) いとめでたし詞めでたしといはるゝは、あらしぞ霞む関の杉村、さくら色の庭の春風など、けぎやかなるが多かり。それも一ツの姿にて、あしとにはあらねど、初学の必心よする所にて、浅近なるニちかし。いはゞ詞の花の山口なり。此集には、えんに奥深きも、いうにたけ高きもありて、おくのさかりはこよなき物をや。近來新古今集を華やかなるに過たりといひ、つくり物也などいふ人多し。それもこれらのけぎやかなるをみていふなれば、此集の山口にまよひし人也。此集は変幻自在なる事をしらず、編き見解なり。 (9)】

(1) 水中

(2) ヨミステタルニモジナレバ上へハカヘラズ意ヲ含メリ

(3) 水中ト解ザレバアタラズ

(4) コヽニハツバカズ

(5) 立ノボル浪ハカスム物也

(6) ワロキ哥モアルヲシラヌナリ

(7) 上ヘカヘル詞トノミ思フ故也

(8) 以下ヨロシ

(9) 此説メデタシ

【頭書1】此歌ノ波ハ立カヘル浪ニアラズ凡テ海面水中ノ有形ヲサシテ云

リ 例アルコト也 一首ノ意ハ難波潟ノカスミタル春ノ夜ノ月ノ実景ガ其マヽ水中ニ生写シニ見エテ天モ水ノ底モ同ジ臘月ノ夜ノサマガ面白シト也カスマヌ水ノ中マデ霞ガタチテ臘ナル月ガ海ノ底ニモ見ユル風情ヲ云テスベテ難波ノ夜ノ春色ヲ賞美シタル也 トヂメノニモジハ云ステタル辞ニテ意ヲ含ミタレバ上ニカヘルコトナシ 俗言ニモアルコト也 ニモジ重キ哥ナルニヨリテ美濃ニモ臘月夜ナル故ニ云々尾張モクモリタルナリニウツル故ニナドヽ解ナガライキホヒヅキテクルシトハ何ゴトゾ 此ニモジヲ心得カネタルニヨリテ恋ノ部ノ結びモオカヌ人ノチギリニトアル哥ヲモ解カネテムツカシキ歌ナリト云リ 扱又露ノムシロニ嶺ノアラシニナドアルハヨク解タルハ例ヲオスコトウトシ 畢竟ハ是モ此先生ノ云々云説ヲ立ントテ歌ニ疵ヲ付テ言出タルモノ也 其論ハイトヨロシケレドモ立所ヲ不考メデタキ歌ニ難ヲ付テ云フガイトヽワロシ

【貼紙1】云ステタルにモジ

はらひかねさこそは露のしげからめ宿か月の袖のせばきに
冬夜の長きを送る袖ぬれぬ曉方の四方の嵐に

かくしてもあかせばいくよ過ぬらん山路の苔の露のむしろに

床の霜枕の氷消わびぬむすびもおかぬ人のちぎりに

泪川身もうきぬべきね覚哉はかなき夢の名残斗りに

山里は世のうきよりは住わびぬ殊の外なる嶺の嵐に

此外数首有り 皆重きにもじにて意を含めて云すてたるものなり詞の玉の緒に 上にかへるてにをは也と斗り解れしは意たがへり大かた上にかへるはすくなし

尾張此一首斗りを結句のにモジヲ難ジタルハ不聞 美濃臘月夜にかすみけりと解れたるはあたらす

補注

(7) 上ヘカヘル詞―上ニカハル辞 (田)。

【頭書1】云々云説ヲ―云々ト云説ヲ (田)。

【貼紙1】○山里は世のうきよりは―山里は世のうきよりは (田)。○上にかへるはすくなし―上にかへるてにをは少なし (田)。

58 今はとてたのむの雁も打わびぬ朧月夜の明ぼのゝ空 (三二)

上句二二三と次第してきくべし。田面を伊勢物語の歌によりて雁の歌には多くなのむとよみならへり。【以上此説の如し。】雁ものもゝじは心づよくかへる雁もの意なり。【もの字の説いとよろし。】一首の意は、曙はたびだつ時なる故に、【此意はなし。】たゞおいらかにみるべし。すべてさかし立たる事には、雲を凌ぐいきほひはなき物也。これはいさゝかなる事なれば、とかういふもこちたきやうなれど、古人の氣象をおとさん心ぐるしく、後進のさかしきをよきものに思はんがあやうくてなん⁽²⁾。一首の意は田面の朧月夜のあけぼののけしきに心をとめて、これを見捨て、もはや帰らねばならぬ時分なるがとて、雁もめいわがりにてなくと也。【今は限りとおもへば、田面のおぼる月夜のあけぼののけしきをみすてゝ、別るゝ事をわびしくおもひてうちななくと也。わぶとはなくにつけていへり。

(1) ヨロシ

(2) ヨキ云也

【頭書1】二二三次第シテモ聞エ又一二三ト本ノマヽニテモヨク聞ユル也 俗(タゞ)ノ言語(コトバ)ニモ此前後ハ常ニカヨハシテ云コトナレバタレモヨク心得タルハコビ也 注解無用ナル上ニ初心ノマヨフコト也

補注

【頭書1】俗ノ言語ニモ―俗ノ言語ニモ(田)。

刑部卿頼輔が歌合し侍けるにのみてつかはしける
59 きく人ぞ涙はおつるかへる雅なきて行なる曙の空 (三三)

俊成卿

初二句、よのつねならば、きく人も涙ぞおつるとよむべきを、かくよめる、ぞもじはもじのはたらきに心をつくべし。【むげの初心はもとよむ方、便な

るべけれど、もとより義のことなる事なれば、心ある人はさもあらず。さて、ぞもじはもじのはたらきの事、多くの中にはかくもよむべき事勿論にて、撰集にも、あるかぎりの姿を具せんとていれる、ことわりなる事なれど、打ぎゝあまりきはゞし。打ぎゝのきはやかなるは、品下るわざなれば、此歌此卿の哥にとりては、下のきざみ也。【古歌に、啼わたる雁の涙やおちつらむとあるを心にもちて、【古歌とは、鳴わたる雁の涙や落つらん物おもふ宿の萩の上の露とみえたる也。それを心にもつとは、泪といふもじ、啼といふもじの似たる故にや。なく物に泪をよむ事は、一向平生の事にて、いづれの歌によれりといふべきほどの事にはあらず。雁をおきて、古今集、声はして涙はみえぬ郭公わが衣手のひつをからなん、後撰集、風寒みなく松虫のなみだこそ草葉色どる露と置らめなど、数しらず多し。されば此歌もたゞなくといひ、涙ぞおつるとよめるにて、古哥によりたるにはあらず。子細に過べからず。】今は鳴て別ゆく雁なる故に、【啼てといふに雁も別をかなしむ意みえたり。これきく人のなみだすゝむゆゑ也かし。】聞人ぞ悲しくて其涙はおつると也。【ぞもじは、雁のなく涙をきく人がおとすなり。】

(1) 「雁のなく涙をきく人がおとすなり」(傍線部は各文字の左に朱で丸印「○」を付す。)に傍注「自他ノタガヒアリ」。

【頭書1】一首詞ツゞキワロキ中ニル文字ナド重リテ二三ノ句コトニ聞グルシ

【頭書2】清麗幽玄いとめでたしあはれ宣長初学の為にぞもじはもじの教訓を物せずは下品の貶辞は出来まじを

【頭書3】美濃ハ古抄増抄ノ説ヲトラレタリワロシ 尾張ヨロシ

【頭書4】月清 聞人ノ袖ニユヅリテ郭公鳥鳴音ニ落ル泪ヤハアル 似タル意ナリ

補注

(1) 田中本は「雁のなく涙を」の傍記ナシ。

【頭書2】出来まじを―出来まじきを(田)。

帰雁 撰政

61 忘るなよたのむの沢をたつ雁も稲葉の風の秋の夕暮(三四)

沢と稲葉とは春と秋の田のさまにて(1)よくかなへり。【沢は地儀にて、(2)四季にわたれゝば、春の田のさまとも定がたし。偶沢べをたつ雁をよませ玉へり。かけ合のゆゑにはあらず。(3)】三の句も今はたちてゆくとももの意なり。【いさゝかたがへり。春の沢べの哀をみすてゝ行雁なりとも也(4)】。風は、古歌に、秋風に初雅がねぞ聞ゆなる、秋風にさそはれわたる(5)などありて、よせあり。【秋風と雁とをよみあはせたる哥は、千万多かれど、さりとて風を雁の縁の語とはいひがたし。たゞ稲葉ふく風のあはれなる也。畢竟はたのむの沢の春の哀をみすてゝ行雁でも、稲葉の(6)風の夕ぐれの秋の哀は、わすれずきたれといふ事也。かく沢を春季とさだめ、風を雁の縁と(7)あながちにいはるゝは、縁語上下かけ合たりといはんとの事なめり(8)。抑縁語を上下におけと云教は、上下の句をはなれゝにせじとの料にて、むげの初心を教る法也。よき哥は縁の詞の配当にはよるまじ。此事今時の通弊なり。○(9)】はてにをもじをそへて心得べし。

(1) 此注面白シ

(2) 理屈也ワロシ 四季ニワタル沢ヲ春ト聞ユルヨミナシガメデタキ也

(3) 目前ノ春ヲコトワラズ秋ノ夕暮ト云テ沢ヲ春ニヨメルガカケ合故也

(4) イトコマカ也ミノ、通ニテヨシ

(5) 是ヲヒカレタルハヌルシ

(6) 露ノニテモ哀ナレ共雁ノヨセニ風トイヘル也

(7) アナガチニハアラズ

(8) 是ナリヨロシ

(9) ○此語ハイト／＼ヨロシオロソカニ見ルベカラズ縁語ニテ仕立タル歌モ多クアリテヨキ歌モアレ共尚気概一首ニ行ワタリテ縁ニ引カレザルヨキ歌ニハアラズ此説ヲ云出ントテ此哥ノ注ヲウチタルハ皆アアラズ論ノタ

テ所ヲ取タガヘタルナリ此意処々ニアリテワロシ

【頭書1】風ハ雁ノ縁ニヨメバ雁ノ縁也凡テ草木天象地儀ニヨセテヨメバ其物ノ縁ナリサテ引離シテヨメバ無縁ニナルコトニテ皆歌ノ魂ニアルコトヲ知ラザルニヤ四ノ句稲葉ノ露ノトシテハ雁ノヨセニナラヌコトヲ思フベシ

補注

(3) カケ合故也―カケ合ノ故也(田)。

(9) ○此語ハ―此論ハ(田)。○タテ所ヲ―アテ所ヲ(田)。

【頭書1】思フベシ―思へ(田)。

百首歌奉りし時

62 帰る雁今はの心あり明に月と花との名こそをしけれ(三五)

(1) 此月花に雁の心をとゞめず見すてゝゆかむは、雁にめでられぬなれば、あたらし月花の名をれぞと、月花のために名をゝしみたる也。【以上みなよろし。】今はといへるも、こゝろといへるも、下句に正しくあたらず。【すべてよき哥は、月花の景物にも、余韻をふくめておもはせたる物也。さるは詞のうへにはなけれども、打よめばそれとしらるゝやうによみなしたるなり。この歌は、有明の月に花をむすびたれば、弥生廿日ばかりの事也。さては雁もかへらではえあらぬ時節故、今はの心あるなり。下句に正しくあたらずとはいかず。すべてさる風韻には心をとめられず。心ぐるしき事也(2)。猶いはゞ、今はの心と熟したるもじを、今はといへるも心といへるもと、きれゝにして、下句にあたらぬやうにして難ぜられたるはあながち也。】心あり明といへるもしひたるいひかけなり。【今はの心と熟語にいひなしたれば、ありともなしともいはるゝ也。何の難かあらん。】又三の句のにもじもたゞよはしくきこゆ(3)。【こゝは文ならば、いまはの心ある有あけにといふべき所也。あり明は時刻にて、あけぼのにといふも同じ事也。にもじ何かたゞよはしき。(4)】又月には有明といへるあへしらひあれども、花のあへしらひの(5)詞のなきもたらはぬこゝちす。【此難はゆゑなき事に

はあらず。その故は、上にさかりといひ有明といひ、下に月といひ花といはんは、合掌の句法にて、此歌にもさる詞あらんもいとよき事なれば也。されど、さる句法のある故は、上下ちからをひとせんととの構へにて、上の句おもしろくやうありげにて、下句かろく何ともなからん事をうれひし也。ちからだにひとしくは、さる句法になづむべき^ニあらず。魚をえて筌をわするといふ事もあるなるべし。⁽⁶⁾】

(1) 古抄ノ説也

(2) ヨロシ

(3) ヨロシ

(4) ヨキシラベニハアラズ下ノ句モサセルコトモナク金玉トハ云難カルベシ

(5) カヘル雁ガ花ノ縁ニヒバク也時術ノカケ合也

(6) メデタシ

【頭書1】増抄ニカヘリヌベキ雁ヲ扱モ月花ハエトメヌコト哉トアリ

【頭書2】ニ文字タバヨハシキニモアラズテニヲハアシキニモアラズ唱ヘアゲテ声韻ノアシキ也山カナ花カナナド、同意ニテ第一ノ韻重レバ大方ハヨカラヌモノ也此哥モ三ノ句一二ノ韻重リテワロシ

【頭書3】合掌ノ句法ト云ガアルニハアラズ仮ノ名ニマヨフベカラズ

補注

(1) 古抄ノ説也——古抄ノ説(田)。

(5) 時術——時刻(田)。

【頭書2】○声韻ノアシキ也——声^キ韻ノアシキ也(田)。○此哥モ三ノ句一二ノ韻重リテワロシ——此歌モ三句二ノ韻重リテワロシ(田)。

【頭書3】句法と云ガ——句法ト云法ガ(田)。

守覚法親王家五十首歌^ニ

定家朝臣

63 霜まよふ空にしをれし雁がねの帰るつばさに春雨ぞ降(三六)

霜につばさしをれて来りし雁の、今又春雨にしをれて帰ると也。しをれしを春雨の方へもひゞかせ、つばさを上へもひゞかせ、又帰るといへるにて、上は去年の秋来たりし事なることおのづからきこえたり。かやうの所をよく心得ざれば昔の歌の趣もみえがたく、みづからのうたも、よきはよみえがたきわざぞかし。【此先生の歌に、⁽¹⁾すむかげもあだの大野の⁽²⁾花の露色なる月に秋風ぞふくとよまれたり。上下ひゞきあふ事をほめらるゝ也。されど此歌のよきは風調のよき也⁽³⁾。かけ合にはあらず。此比の歌は、新奇をつとめて変幻万差なり。一隅を守りたる物^ニあらず。⁽⁴⁾】

(1) ヨキ歌也

(2) 「花」の左に朱で「□」を付して傍注「萩 鈴屋集」。

(3) サルコト也

(4) ヨロシキ説也

【頭書1】すむかげも云とメデタキ哥ナルニ初五文字ツタナクカゲモカゲモアダト云カケラレテコトワリアマリキハヤカナルニヨリテ下ノ句ノ風韻手ガラウトクナレルナリアダノ大野ト云テ露二月ニ秋風ゾフクト云ヘバ露ノ月ノコボル、風景アリ——ト見ユルコトナレバスムカゲモアダト云カケラレタルガクダ——シク聞エテ気韻クダル也 鈴屋集此難イト多シヒラキ見テ知ベシ

補注

【頭書1】初五文字ツタナクカゲモカゲモ——初五文字ツタナクカゲモ(田)。

百首ノ歌奉りし時

摂政

66 ときはなる山のいはねにむす苔のそめぬみどりに春雨ぞふる(三七)

むす苔のと切て、そめぬ緑とつゞけて心得べし。むす苔のそめぬとつゞきては、そめぬといはではかなはず。そめぬは春雨のそめぬ也。【○そめぬ緑といふ⁽¹⁾ことは聞取がたし。一首の意は、山の岩ねにむす苔の、わがそめたるにもあらず、ときはなる緑なるに、わがそめたるやうに、雨がふりかゝると也。】ときはも岩根もそめぬ意をたすけたり。【ときはなるは苔にかゝ

れり。二句にはつゞかず。又岩ねは、そめぬ意をたすけたりともきこえず。

【⁽²⁾】

(1) 詞ノハコビヲシラヌナリ

(2) 是ハサルコト也

【頭書1】○ソマヌトハ苔ノ方ニツキテ云フ詞ソネヌハ両ノ方ニ付テ云詞也
也自他ノタガヒ也

建仁元年三月歌合に霞隔遠樹 権中納言公経

72 高瀬さす六田の淀の柳原みどりもふかくかすむ春かな (三八)

淀の水の深きにむかへて、緑もふかくかすむと也。【これ例の上下かけ合の説なれど、淀は六田の淀といふ地名にて、柳原の哥なれば、淀の水の深からん事、此歌によりなき事也。四の句のもゝじをあしく心えて、かくいはるゝ也。四の句のもゝじは、うら山しくもかへるなみ哉など、哉に応じたるもにてこゝろなきが如し。牽強すべからず。一首の意、六田のよどの柳原のみどりがふかくかすみてみゆると也。もはかるき嘆辞。】下句詞はめでたけれど、心まぎらはしくきこゆ。其故は深く霞みて、柳の緑の色をへだつる意なるべき。【これはかやうにふかくへだつる意にはあらず。たゞ柳原に立わたりたる霞のこきみどりにみゆる也。春がすみ色のちぐさにみえつるはたなびく山の花のかげかもなどやうに、かすみを色の、もるやうによむも常の事也。色のもるやうによみても、霞だにたてば、題の隔の字の意はそなはれり。】緑も深くといへるは霞む故にみどりの深きといふやうにきこゆれば也。【もゝじをニッをかねたるものとしても、みどりもふかくかすみもふかきといふ意になるべし。霞む故にみどりの深き意とはいかでか聞えむ。】

(1) 尾張ヨロシ古抄解ナリ

【頭書1】百首哥ノ中ニ○あらしふく岸の柳の稲むしろをりしく波にまかせてぞみる 崇徳院御歌

【頭書2】○古抄云八雲御抄柳ノ部ニイナムシロ是ハ水ノ底ニアル枝ノ稲

ムシロニ似タルナリ云々奥義抄曰川ノ底ニ短キ草ノ莖ヲシキタルヤウニオヒタルヲ稲ムシロトハ云也云々をりしく波ハ打シキル波也岸ニナビク柳ノ水ニヒタリテ面白キヲ波ニマカセテ見ルト也トイヘリ

【頭書3】美濃ワロシ 尾張ヨロシ

【貼紙1】霞ノ緑ノフカケレバ柳原ヲヘダテタルナリモトイヘルハ柳ノ緑ノエンニテイヘルナリ

補注

(1) 古抄解ナリ―古抄ノ解也(田)。

【頭書1】崇徳院御歌―崇徳院御製(田)。

【頭書2】八雲御抄―八雲御抄ニ(田)。

百首歌よみ侍ける時春歌 殷富門院大輔

73、春かぜの霞ふきとくたえまよりみだれてなびく青柳のいと (三九)

【画のごとくめにうかびてめでたき歌なるを、みのゝ家づとにはぶかれたるは、青柳上句よせなしとにや。】

千五百番歌合に 藤原雅経

74 白雲のたえまになびく青柳のかづらき山に春風ぞ吹 (四〇)

青柳は葛城の枕ことばなるを、やがて其山に生立る柳に用ひたり。さて柳は風のふくによりてなびくなるを、たしかにさはいはで、なびく青柳のとまづいひて、春風ぞふくととちめたるは、柳のなびくによりて、春風のふくがみゆるさまにて、ゆるやかなるもの也。【以上此説の如し。されど上に青柳のなびくといひ、下に春風のふくといふやうのしたての哥は常ある事也。一首のめでたきは始末つゞけざまのめでたき也。此かけ合の故にはあらず。一首の意は、しら雲のたえまに青柳のなびくは、かづらき山で春風がふくとみゆるとなり。】或人柳は山の上にある物にあらずと難じたれど、かの家隆朝臣の、末の松山なみにはなるゝ横雲などをこそさもいはめ、【み

づから誤解して、無理なる歌の例とせらるゝは、こゝろぐるしき事也。】山の上に柳をよめるばかりの事は、此集の比にとりてはなでう事かあらん。【此集のころとても、わろき事はわろし。いかにゆるさるゝにかあらん。さて此歌はいともくめでたくて、眼をとげればそのけしきたゞこゝもとにかび来るこゝちす。かばかりの名哥なれば、山に柳をよみたらんも、つみきえて、ひたすらにめでたけれど、打まかせては少しいかゞ也。大かた物には相応すると相応せざるとあり。柳は池川堤渡など、水辺にはいとよかめれど、かさなる山雲ある嶺など、山類には、などやらん似つかはしからず。さりとて柳は山にもおふる物なれば、よまぬ事と今定むるにはあらず。たゞ何となく相応せざるをいふ也。その相応すると相応せざるとを弁ずるは、和歌に至要なる事なり。用意あるべし。】

(1) 此説エタリ

補注

(1) 此説エタリ―此説聞エタリ(田)。

有家朝臣

75 青柳の糸に玉ぬくしら露のしらずいくよの春かへぬらん(四一)

へぬらんは糸の縁也。【糸に玉ぬくしら露のは、柳の実景にて、しらずとかゝる序也。かやうなるを有心序といふ。一首の意、(1) 青柳は、いく世の春をへしぞといふ義、たゞ古柳をよめる也。】拾遺元輔、青柳のみどりの糸をくりかへしいくらばかりの春をへぬらんといふ哥にことなる所もみえず。【拾遺集なるは、糸に玉ぬくしら露のしらずいく世と云つゞきなし。ことなる所なしとはいかず。此歌のめでたきは、此二三句の詞つゞきめでたきにて、意は拾遺といたくもことならず。すべて等類をのがるといふは、一句も等類なき事にはあらず。花を雲と見、露を玉かとうたがふことは、誰人かよまざらん。しか我人よむ中に、よき歌にはめづらしき心詞あるをこそいふなれ。】玉も用なくきこゆ。【玉は糸にも露にもよせあり。下句にひかるみがくなどいふ詞のなからんからに、用なしとはいかでかいむ。】

(1) 古抄増抄注ナリ

【頭書1】尾張ヨロシ

補注

(1) 古抄増抄注ナリ―古抄増抄ノ説也(田)。

宮内卿

76 うすくこき野べの緑のわか草に跡までみゆるゆきの村消(四二)

跡とは、雪のきえ果たる後をいへるにて、雪の縁の詞にてもある也。【あまりさかし立てこまかなる趣向の哥は、一首いうならぬ物なるを、これは打聞いとめでたし。よろづよりも打聞のめでたきをめでたしとする物なれば、撰に入し事はむべなれど、一首巧に過てこざかしげ也。すべて哥は、大どかにて力あるをよしとす。こざかしきはよくもあらず。世上に新古今集は巧に過たりとて、無理なる哥のやうにいふ輩もあるは、氣韻をくれたる人の、疎漏にのみていふ事にしあれど、多くはかやうの哥どもを、此集の本糸とおもふ故也。先生もいたくめでられて、四ノ句いとめづらかなり、よくとゝのへる哥也と有て、我と褒貶反覆す。識者えらび取べし。】(1) 雪は残らず消果ての後まで、始の村消の跡のみゆるよし也。【雪の久しく残たる所は、若草の色うすく、とく消たる所はこき也。一首の意は、野べのわか草のみどりの、こきうすきにて、雪は消はてたる後までも、村消にてありし所が見分らるゝと也。】(2)

(1) コマカナルコトヲ云モ哥也ワロシト定ムベカラズ人ノ心と也

(2) 古抄増抄聞書美濃尾張トモニ同ジ

【頭書1】尾張高論也ヨロシ 増抄云此歌ヲ案ズルトテ血ヲ吐タレバ吐血ノ宮内卿ト云トゾトアリヲカシヒ伝ナリ

補注

(2) トモニ同ジトモニ同説(田)。

【頭書1】ヲカシヒ伝ナリ―ヲカシキ言伝ヘナリ(田)。

79 よしの山さくらが枝に雪ちりて花おそげなる年^{春ノ}、⁽¹⁾にもある哉(四三)

ちりてといへる詞、花のかたへひゞけり。【一首の意は、吉野山はさくらの枝に、⁽²⁾花の俤に雪が散て、まことの花は、ことしは遅かりそうな年ではあると也。】下句此集のころにては、此法師のふりなり。【げに此下句は上人の常調也。されど二三の句にいとよく相応してちからあり。輕易に過たる哥に非ず。】

(1) 春ニテハ歌ヲナサズ

(2) 増抄ノ説也

摂政家百首歌合野遊

家隆朝臣

82 おもふどちそこもしらず行くれぬ花の宿かせ野べのうぐひす(四四)

本歌、春の山べにうちむれて、云々、【おもふどち春の山べに打むれてそこともしらぬたびねしてしがといふ歌なり。一二の句は勿論、花の宿かせも、本歌にたびねとあるより出たる趣也。たゞ此一首をとれる哥也。】くれなばなげの花の陰かは云々。【いざけふは春の山べにまじりなんくれなばなげの花の陰かはとある歌なり。暮といふもじと、花といふもじあるばかりにて、

○すべては似つかぬ事なり。此哥の本哥といふべくもあらず。⁽¹⁾六百番歌合の判に、素性が哥を取過たるやうにいへれど、さはあらず。【これはさる事なり。本哥をとる法、多くは、またじとおもへば村雨の空、故郷寒く衣うつなり、などやうに、ことばをとりて趣をかふる也。これをから人は軀体換骨といふ。軀体換骨は、一もじも多く取たるを名譽とす。かへたるもじは少くて、趣の清くかはれるをめづる也。今人は古哥をとり過たりと常いふことなれど、かやうの子細には心づかじ物をや。一首の意は、氣のあふたどうし、春の山べに遊びて、こゝはどこかもしらぬが、日がくれたほどに、花のやどをかせてくれよ、野べのうぐひすよとなり。古歌は旅ね

してしがとねがひたる意、これは其ねがひのごとく旅ねするこゝろ也。】

(1) ヨロシ

【頭書1】○似ツカヌコトニハアラズサレドモ凡テノ歌ニカク似ヨリタルコトヲトリ出テ宛レバイナトイハレヌガイト多ケレドモ皆自ラノコトナレバ本歌ナリトハ解ベカラズ其ノ風情アリト説シメスガヨロシ

【頭書2】増抄頭書ニ業平ノカリクラシ七タツメニ宿カラン天ノ河原ニ我ハ来ニケリノ歌ニ似タル作意ナリ鶯ノアル所故ニ花ノ宿カセトアルガ七タツメノアル所ナレバ宿カラントアルト似タリト也カヽルコトヲ思ヒテヨマレタルニハアラネド初心ニ歌ノ意ヲ示スニハヨロシ

補注

【頭書2】所ナレバ宿カラント―田中本「所故ニ花ノ宿カセト」(「セ」の左に除棄記号あり)。

百首歌奉し時

式子内親王

83 今さくら咲ぬとみえて薄ぐもり春にかすめる世のけしき哉(四五)

初句、いうならず。今といへるは心をいれてよみ玉へる詞とは聞ゆれど、さしもあらず。此詞なくとも有べきさまなれば也。【此初句をたゞ一句きり出ては、いうにもあらずやあらん。一首にむすびては、いと／＼めでたき句也。さるは此句をさくら花としては、上句あまりのど／＼として、春にかすめるの雄壮なるにかけあはぬ故、かくよみて、語勢をつよくしたる也。先生は詞のうへの照応をのみときて、語勢の照応には心をいれられず。詞の照応は、顕然なる事なれば、凡人も心づくわざるを、語勢の照応、氣韻の照応は、跡なきものなれば、それをむねと注せらるべきにや。ひめみこの御歌にしも、かく雄偉なる語勢のみゆるは、めづらかにめでたくなん。】二の句は、世のけしきのさやうにみゆる也。【此句はさくらへのみかゝりて、世のけしきへはつゞかず。こゝは俗にいはず、まうさくらが咲たとみえてといふ意也。むつかしくみるべからず。又今といふ字はまうの義にて、歌

の至要なるをなくともあるべしとはいかず。【四の句は春のけしきにかすめるをいふ。されど此にもじ少いやしくきこゆ。】此哥は、春のけしきになりて、世上がうすぐもりにかすむといへる也。此にもじ、何のいやしき事かあらん。○霞になびく明ぼのゝ空などつねの事なるをや。一首の意は、まうさくらが咲たとみえて、世上のけしきが春に⁽¹⁾なりて、うすぐもりにかすむとなり。【又近き世に秋にみしなど多くよむにもじは、殊にいやしき詞なり。】俗言に、春にみた、秋に来たといふ事のなければ、俗なるにはあらねど⁽²⁾、一向にことわりなきこと也。】

(1) 是ナリ

(2) コトワリナキホドノコトナレバ俗ナルハモトヨリノコトナルヲ俗ニハアラネド、イヘルハ私説ヲツヨメント構へタル強ゴト也カクサマノ無理ヲイヘルコトイト多クテワロシ

【頭書1】増抄ニ今ト云ニテイツカ／＼ト待タル心アリ

【頭書2】○霞ニナビクハ烟ガ下地アル霞ニケヲサレテ随ヒナビキテ己ガ象ヲ失フ義ナリコ、ハ此注ノ如クナレバイサ、カタガヘリ一首ノサマヲ可考秋ニオドロクトアルト同ジニ也此注スベテ尾張ヨロシ 美濃ワロシ

花のうた 西行

86 芳野山こぞのしをりの道かへてまだみぬ方の花を尋ん (四六)

よくとゝのへり。【一首の意は、吉野山の、こぞの花見に来た時のしをり⁽¹⁾が、まだ⁽²⁾そのまゝである、その方はまづ去年見たでよいとして、しをりのない方へ道をかへて、まだみぬ方角の花をたづぬべしとなり。⁽³⁾】
(1) 「しをりか、また」の傍線部の各文字の左に朱で丸印「○」を付し、「り」と「か」の間に朱で「セシ」と記す。

(2) 此心ハナシ

(3) 枝折ヲ体ニ見タルハワロシ道カヘテトイハン料ナレバ噂也シカ見ザレバ歌ヲナサズ哥ノ死活ハコ、ラナリ

補注

(3) イハン料―イハンノ料(田)。

和歌所にて春の歌 寂蓮

87 かづらきやたかまのさくら咲にけり立田のおくにかゝる白雲 (四七)

高間のさくら立田の奥、二の内に一は山といふ事あらまほし⁽¹⁾。【山といふ字なきも、何の難かはあらん。】

(1) 初心ニ慥ニヨメト教ラレシナレバ其方ニトリテハアシキ教ニハアラネドモ此集ヲ弁ゼラル、ニハサラニヲリアハヌ論ナリ

百首歌たてまつりし時 定家朝臣

91 白雲の春はかさねて立田山をぐらの峰に花にほふらし (四八)

万葉長哥に

(1) 本歌、白雲の立田の山の滝の上の小倉の嶺に咲をゝる桜の花は云々と有を、春はかさねてと取なし玉へる、めでたし。【立田山にしら雲とよむも、をぐらのみねとよむも、常の事也。古歌のゆゑにはあらず。⁽²⁾】結句咲ぬらしとあるべきを、匂ふらしとあるは、詞はいさゝか勝りたれど、⁽³⁾此歌にては匂ふは似つかはしからず。【⁽⁴⁾花にほふらしとは、色のにほひ也。香のにほひにはあらず。似つかはしからずとはいかず。一首の意は、いつもたつしら雲のうへへ、春は又折かさねてしら雲がたつ、これは大かた立田の小倉の峰に花が咲て、その色がほんのりとみゆるのであるらしい也。】次なる家衡朝臣の哥もおなじ。【これもおなじ事。雲のやうに花がほんのりとみゆる也。】

(1) 古抄説也

(2) シカラズ

(3) 新説ワロシ

(4) 以下尾張ヨロシ

【頭書1】常ノコトニハアレド是ハ古歌ニヨリテヨマレタルサマシルシ

題しらず 藤原家衡朝臣

92、吉野山花や盛に匂ふらん故郷さらぬ峰のしら雲（四九）

【一首の意は、あの雲は、雲ではなうて、吉野山の花がさかりに咲て、その色がほんのりとみゆるのであらう、雲ならば、あなたこなたの峰にうつる物なるに、あれは故郷のあたりをさらずしてゐるからと也。】

(1) 増抄ノ注ナリ

和歌所歌合に羈旅花 雅経

93 岩根ふみかさなる山をわけすて、花もいくへの跡のしら雲（五〇）

伊勢物語に、岩ねふみかさなる山にあらねども、云々。【一二の句の詞の拠也。初句は序。花ざかりの山を、いくへも／分すて、さてかへりみれば、跡の方に雲がいくへも／立た、あれは大かた見て来た花であらうと也。】

【頭書1】増抄ニ花ヲ離レテ有テ面白キ風情也トアリ余韵也

五十首歌奉し時

94 たづね来て花にくらせる木の間より待としもなき山端の月（五一）

(1) 二の句、花を見てくらせるにはあらず、尋ね来ていまだ見ずして暮ぬるよし也。【花を尋来て、其花がさかりなる故に、日を暮したる也。】二ノ句の勢しか聞ゆ。尋ね来ては俗に見に來てといふにあたる。そこよこよともとめわびたる義にあらず。これをいまだ見ざりし義としては、撰集の次第もみだれていかゞなり。二ノ句のにもじに心をつくべし。花をみてあかず、たてりしほど、日の暮たりときこえずや。【もし既に見たるにしては尋ね来てといへるも詮なく、【たづねてみたらば詮あるべき也。世上尋花といふ

題には、多くいまだみざる意をよむ、其うつりにやあらん。抑行て人にまみえたるも尋人と云べし。尋花も満山のさかりをみたらんも題にたがふ所なし。せばき論なり。【四ノ句のかけ合もちからなし。【待といふもじを、花へもかけてみる故也。それはわろし。たゞ月にのみかゝれり。】新拾遺集俊成卿の哥にも、山桜咲やらぬまはくれごとにもたゞぞみける春夜の月。下句思ひかけざりし月を見てそれもおもしろき意にてもあるべけれど、【此心にていとよく聞えたり。】四の句のさまさはきこえず。花をこそ見むとおもふに、待もせぬ月の出たるよとおもひて、月をばめでぬ方に聞えていかゞ。

【しもといふ字をあしく心えられたる也。しもは、詞の玉緒に、二字ともにやすめ辞にていさゝかも心なしといはれたるそれ也。さては待となき山端の月にて、めづるともめでぬとも調のうへになければ、物にしたがひて定むべきに、山のは月の出しとて、いとひ腹だつ人あらん物かは。此難は人情にうとし。さて待となきとは、思ひ設ざりし事にて、下句思ひもよらぬ月までが出たといふ事なれば、よろこぶ心は余情にあるべし。】右の俊成卿の哥は、四ノ句、さま月をもめづる方に聞えたり。【俊成卿の哥は、月をもめづる意によく聞えたれど、さるまゝに意尽て余韻なし。此哥にくらべては頗境を異にしたり。此集にもれて、新拾遺にいれるも此故なり。かの集などは御子左の風にて風韻おくれたる事多かり。】

(1) 鈴屋翁新説ワロシ部立ヲモ考ヘラレザリシハ何ゴトゾ

(2) 旧説也ヨロシ

(3) 尾張凡テ説得タリ古抄ニヨレリ 美濃イトワロシ新説ナリ

【頭書1】古抄曰 宗祇曰月ヲ思ハヌニハアラズカ、ル月マデトハ思ハザリシヲアヒニ逢タル興ノ面白キ心ニヤトアリ

補注

(1) 鈴屋翁—鈴翁(田)。

【頭書1】古抄曰—田中本にナシ。

故郷花 慈円大僧正

95 ちりちらず人も尋ねぬ故郷の露けき花に春かぜぞ吹（五二）

露けき花と云に、見るあるじのさびしくあはれなる心をもたせたり。【たゞ故郷のさま也。露を涙とみるはわろし。】⁽¹⁾一首の意は、あはれ故郷ならぬ所の花ならば、ちるやちらずやと人も尋ね来て、かやうにちるをみば⁽²⁾、をしむ人もあまたあるべき物と思へるさま也。【たがひたるにもあらねど迂遠にて、詞に親しからず。一首の意は、ちらうがちるまいが、すてゝ置て、人が見にも来ぬ、ふる里の⁽³⁾しめぐとした花を、春風が吹てちらす、あたらし物を人にもみせずちらすことかなとなり。】

(1) 余韵ナレバワロシト云ベカラズ

(2) カヽル意ハイカヤウナルヲモソヘテ解ルヽナリ余韵ニハ慥ニ詞ヲ当ベカラズ

(3) 泪ヲ思ハセル哥ナル故ニ此詞出クルナリ

【頭書1】涙と見るはわろきはしらねど此露は花の上のみとおもはれず

補注

(2) イカヤウナルヲモソヘテ解ルヽナリ―イカヤウナルコトヲモソヘテトカルヽコト也(田)。

千五百番歌合に

通具卿

96 いそのかみふるのゝさくら誰うゑて春は⁽¹⁾わすれぬかたみなるらむ(五三)

植けむ時をしる人ぞなき【石上ふるの山べのさくら花うゑけん時をしる人ぞなき。】とあるを、誰うゑてとゝれり。春はと切てこゝろうべし。忘れぬは植けむいにしへをわすれぬ也。【誰うゑてとある、其うゑたる人を忘れぬ也。一首の意は、ふる野のさくらは、昔誰がうゑて置いてこれをうゑたる人は心ある人哉と、春は必おもひ出さるゝ形見にした事ぞ、さてくよい物をうゑて、よい事をしたと也。】これらは古今集の中のよき哥のたぐひ也。【古今集には古哥をとれる哥なし。あるもわづかにて、打まかせぬ事也。】

ことに此歌は、植けむ時をしる人ぞなきを、誰うゑてととりなしたるなど、いと今めかしくて、猶此集の風骨なり。古今集の体にはあらず。さて又古今集に入てもとある語勢は、古今集は此集よりもいたく勝れるが如し。世上にも何となくさる物に思ひを人多かるべし。これさらくしからぬ事也。かれも一ツの姿なり。これも一ツの姿なり。よき哥はよく、わろき哥はわろし。百首歌合などの此時ほど盛なりし事もなく、英雄豪傑の此時ほど出現したる事もなければ、よし勝らずとも、いさゝかも劣る事はあらじと正明はおもふなり。⁽²⁾】

(1) ワスラレヌノ意也

(2) 尾張難注ヨロシ

【頭書1】鈴屋翁ハ古今集ハ此集ヨリイタクマサレリト思ヒツメテ居ラレシコト此集ノ解ニテ明ラカニシラタリ 新古今集ノ真面目ヲサグリ得ラレザリシト見エテ解ザマ疎漏ナルコト甚シ

補注

【頭書1】明ラカニシラタリ―明カニ知ラレタリ(田)。

正三位秀能

97、花ぞみる道の芝草ふみ分て吉野の宮の春の明ぼの(五四)

【花ぞみるは花をぞみる也。四五二三一と打かへしてこゝろうべし。】⁽¹⁾

(1) 歌ヲ打吟ジ心得ルニ等勘ハイラズ一首ヲ一目ニ見ルベシ

【頭書1】初句余りめでたしとも覚えず

【頭書2】初句云切テ一首ニ行ワタラセタル哥此時代ニ多シ勢アリテコノマシキモノ也

【頭書3】花ヲゾ見ルト云ヲ花ゾ見ルトヨミテハモモジタラデ花ガ外ノ物ヲ見ル如クニ聞ユルニツキテ難注アレ共然テニヲハニヨリテ理ヲ云ベカラズ一通ハヨミ得ガタキコトニハアレ共例アルコトニテ一首ノ仕立ニヨルコトゾ此哥ハ初五モジガ一首ノ趣意ナリ

補注

(1) 打吟ジ―打吟ジテ(田)。

【頭書3】○モモジタラデーヲモジ足ラデ(田)。○見ル如クニ―見ル如クニモ(田)。○一通ハヨミ得ガタキ―一通リヨミ得難キ(田)。

裏表紙見返し
裏表紙

有家朝臣

98 朝日影にほへる山のさくら花つれなくきえぬ雪かとぞみる(五五)

さくら花の朝日にあたれる色はこよなく勝りて誠に雪のごとみゆるもの也。朝日かげにほへる山といふは、万葉の詞にて、それは朝日影の匂へる山なるを、此歌にては朝日かげに山のさくらの匂へる也。【朝日かげに、山の桜のほふといへば、薄くれなゐにみゆる事にて、雪かとぞみるにかけあはず。此歌も万葉のごとく朝日かげのほふ也。又詞がらもさては初句ににもじなくてくるしげなるをや。一首の意は、朝日のかげがあかくとてゐる山の、さくらの真白なのを、しんぼうよくきえずにある雪かと(1)おもふと也。】つれなくと云詞、時にかなひていたづらならざるうへに、朝日影にもよせあり。【時にかなひてとは、(2)晩春まで雪の残りし義歟。歌にその意はなきなるべし。(3)】

(1)「おもふと也」の各文字の左に朱傍点して右に「見ルトナリ」と傍書。田中本は「おもふ」の各文字の左に朱で丸印「○」を付し右に「見ル」と傍書。

(2)「晩」の右に朱で丸印「○」を付し、「春」の右下から「ニ桜ハナカルベシ」と傍記。

(3)晩春ノ義ニアラズ桜ノ咲時ノコトナリ雪ノ残りシ義ニアラズ雪カト見ルト云噂也

【頭書1】古抄 朝日カゲ匂ヘル山ニ照月ノアカザル妹ヲ山ゴシニシテ匂ヘルハニホヤカナルト云詞也香ノコトニテハナシ

【頭書2】尾張ヨロシ

補注

【頭書1】照月ノ―照レル日ノ(田)。

* 原稿受理 令和七年三月八日
** 教養教育部門